
VITAL・CHAIN～紅い羽根～

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

V I T A L ・ C H A I N ～ 紅い羽根 ～

【Nコード】

N 7 3 4 6 B

【作者名】

雨月

【あらすじ】

後に紅い羽根を持つ天使と呼ばれるかもしれないものの別の世界の物語。やさしいだけではだめなのさあ。

一、

世の中、非日常的なことが極稀に起こる。

それは、非日常的な事件に遭遇する人によって変化するが、主人公は何らかの役割というものが存在するべきだと思う。もしもそれが無かったらもはや主人公とは言えず、脇役だ。まあ、この物語の主人公もそんな一人なのだが、彼はいたって平凡を愛していたりもする。まあ、そんな彼だが、考えが甘い。世の中うまくいかないのはいうまでもない。

ただ、彼の場合は仕方の無かったことなのかもしれない。彼の場合は、御人好しが祟ったのであろう……。

その日の朝、少年は休日だったので河川敷で散歩でもすることに。午前中の半分を勉強に費やし、残りの半分の散歩するのが彼の休日、午前中の過ごし方である。部活は帰宅部で理由は単純明快……彼に言わせてみれば、

「僕が入っても別に強くなるわけ無いよ。」

全く持って消極的な性格をしている。クラスでもどちらかというと静かなほうで、考えを理解されていないところもある。ボーっとしているところを良く見かけられていることもしばしば……。話を戻すと、その日、その場所、その時間は……。彼の運命を直角に変えてしまった出来事が起こった。少年が川の近くに数人の人数が居た。てっきり少年は魚釣りでもしているのかと思い、簡単な気持ちで近付いたのだが……

「よし、追い込んだぞ!!」

「捕まえろっ!!」

それを聞いたときは吊り上げた魚が粹が良かった為ぴちぴち動きまくったのかと思ったのだが、川まで数十センチの所まで追い込まれていたのは粹の良い魚ではなく、見た目麗しい少女であった。

数人の男たちに囲まれても気丈に睨み返している。少年は考えてみた。基本的に御人好しであり、それで友達に騙されて酷い目にあったこともあったが・・・助けることとした。少年は一刻の猶予も無いと思ってとりあえず、彼女の逃げ場を作ることを頭の中で考えた。まず、三人居るうちの一人に体当たりを掛けた。不意を討つのは簡単であった。

「うわっ!!」

見事、一人落ちた。振り返った二人の片方に蹴りを食らわしふらつとしたところへ再び体当たり・・・二人めは一人目の上に身を投げ出した。残った一人は構わずに女の子へと手を伸ばす。犠牲は何人払ってもどうやらこの女の子を捕まえたいらしい・・・。

「それなら・・・。」

捕まった少女ごと、川に落とした。落とすときに女の子の足を掴み、何とか、川から助け出す、もとい、引き上げる。こういうところがうまくいかないのだ。

「ゴホッ・・・ゴホッ・・・。」

むせてかなり苦しんでいる少女をとりあえず川で泳いでる三人から引き離す。そこで背中を叩いてあげるとようやく少女はむせなくなった。

「……普通、落とす？」

「ごめんなさい、なんだか危なそうだったんで……あの、もしかして余計なことでした？」

「いや、助かったから一応、礼を述べておくわよ。ありがとう。」

少年は助けてよかったと思った半分、あの三人には悪いことをしたなあと感じていた。だが、少年はこの可愛い、女の子のほうを選んだのだ。可愛いことは罪である。女の子が可愛くなかったら少年は助けしないで眺めていたかもしれない。

「貴方、名前は？」

「坂^{さかなぎ} 驟^{しゅう}雨^うって言います。」

「そう、私を助けてくれたのは大きいわよ？何か一つ願い事を叶えてあげるわ。」

あの三人が追いかけてこないか、かなり心配であったが、目の前の少女はそんなことは気にしていないようであった。

驟雨は願い事を叶えてあげると言われて願い事を考えたが、特に思いつかなかった。見知らぬ人間に願い事をかなえてもらうのには正直、抵抗があるし、目の前に居るのはなんだか怪しい感じの人間なのだ。つまり、これ以上は関わりにならないほうがいいと思われると彼の問題を先生に当てられた非常時の時とテストの時にフル回転する頭はそう、判断した。

「……いえ、結構ですよ。それより、服が濡れてますから乾か

していきませんか？僕の家なら近くにありますんで……。」

「そう？わかったわ。ありがとう。」

お節介を焼くところも彼の性格の一つであった。驟雨の性格の分らないところはこういうところであり、頭の中で判断してもたまに、その判断を否定してしまうときもあるのだ。たまに、天邪鬼少年ではないかと噂されるときもある。

驟雨の家では個人経営の本屋を営んでおり、店の奥に彼の住む家が合体しているようなものであった。噂では彼の両親は裏の仕事を持っているらしい。

「とりあえず、タオルをどうぞ。」

「ありがと、ところで貴方、何で私に敬語使ってるの？」

少女に尋ねられ、驟雨は自分の身長と相手の身長を比べて答えた。少年が低いわけではないが、その少年よりも少女の身長は高い。顔も驟雨より凛々しい。

「……僕より年上だと思うからです。」

「貴方、何歳？」

「十六です。」

驟雨は自分から女性の年齢を聞こうとしない。知りたいと思った時はさりげなく、その会話に持って言わせたり、他人を使ったりしたりするのだ。驟雨はたまに、せこくなる。

「それなら歳が一緒だから別に敬語を使わなくて結構よ。さ、髪も乾かしたし、別に風邪引くって程、体弱いわけでもないからこれで十分よ。」

「そう？それならいいけど……。」

驟雨は素直だ。そして、人の言った事は90パーセントは信じる。ある条件が加わると誰も信用しなくなるときもあるのだが、基本的には騙されやすいタイプである。まあ、それでこれまで何度か苦しい思いをしてきたのだが……。

「私、“何”に見える？いえ、“どう”見える？」

いきなりの質問に驟雨はこの少女を意外とタカビーな人なのかと思った。自分の事をどう見えるかと聞かれたら大半の男は美少女だと答えるだろう。

「……“容姿端麗”な人だと思うけど？」

ああ、なんか一昔前、こんなことを聞いてくる怪人の類があったな、鎌持って追いかけてくるんだっけなあと思いながら少年は見上げるような格好で少女へと答えを返す。

「……ということは、やっぱり人間に見える？」

「？どういうこと……すると、ロボットだとも言うの？」

驟雨は冗談交じりにそう告げた。ここで頷いてくれればSF路面に話は変わる。だが、少女は首を振った。SFではないからだ。

「いや、私は悪魔よ。」

「……そう、ファンタジーだったんだ？」

驟雨のこの行動に自分は悪魔だと名乗った少女は微妙に不満顔であつた。

「……普通、ここで『何を冗談言ってるんですか？』とか言うじゃない！！そんな簡単に信じる？」

「え！！冗談だったの！！」

「いや、悪魔よ……こんな人間、初めてでなんだか疲れてきた……。」

ため息をついて何かに苦しんでいる悪魔をまじまじと眺めて少年は一人で合点がいった。何かに納得したような顔である。

「成程、だから綺麗なんだ！！」

「……天然ね……まあ、それはいいとして、驟雨、貴方本当にかなえたいことなんて無いの？例えば、死んだ両親を生き返らせるとか……。」

「両親ともに健在です。ぴんぴんしてますよ。」

「お金は？」

「いや、別に……。持つてるほうでもないけど、別に今は欲しいものはないなあ。あるとしても貯金してるし……。」

頭も普通で、今のところは別にこのままでもいいんじゃないかと思っ
て人生を楽観視している少年である。明日は明日の風が吹くと
驟雨自体、思っている。こんな性格だったら幸せに違いない。まあ、
本当がどうかは分からないが……。

「なら、ペットにドラゴンなんてどう？」

「……生き物を安易な気持ちで飼ったらろくな事が無いよ。」

驟雨に提案した全ての案を却下され、悪魔少女はやっきになった。
人間、たまにどうでもいいことに本気になったりするものだ。まあ、
彼女は悪魔なのだが……。

「なら、ちょっと目を瞑って!!」

「?わかった」

目を閉じた驟雨に訪れるのは当然のように闇……そして、いつ
もよりも漆黒さを増しているような感じを受けた驟雨に誰かが呟く。

「……私を助けた恩返しよ。ありがたく受け取りなさい。」

何かが唇に当たって少年は世界が変わったような気がした。何が
変わったのか分からないが、とりあえず、何かが変わった。

「?」

「いつまで目を閉じてるの?……もう目を開けてもいいわよ。」

言われたとおり、ぱちりと目を開ける。目の前に立っていたのは少女であった。少々、顔が赤いようだ。驟雨と目をあわさないように頑張っている。

「……驟雨、そういえば名前を言ってなかったわね？ 私の名前は……まあ、里奈とでも覚えておいて……。」

「はあ、わかったよ。」

こうして、少年は自称悪魔と出会った。これからどのようなことが起きるのか二人はあんまり知らない。しかし、この物語の始めには驟雨、里奈の他、名無しの三人が姿を現していることを忘れてはいけない。まあ、忘れてしまうのも一つの手段かもしれないが……これはまだ、少しばかり後の話となる。

「さ、今日から私もここで暮らすわ。なあに、食費はかからないから安心して結構よ。寝るところだけ、確保すればね？」

二、

その日の午後、少年は昼ごはんを簡単に済ませると、里奈と共に近くの公園に移動した。家にいると家族に見られてしまう可能性があるからだ。見つかったら色々聞かれるに違いない。そういうのを詮索されるのを驟雨は嫌う。

「……里奈、なんで僕の家に住むの？」

「簡単よ、私が貴方の近くに居たいから。」

全く、嬉しい言葉である。一度でもいいから美少女に言われてみたい言葉だ。当然、驟雨も口を開けてパクパク動かしている。

「な、なんで……。」

「……貴方、なんだかとてもおかしいのよ。それに、何かが違う気がするし。」

「おかしいなら笑えば？違うのなら、正せば？」

「……私を助けたとき、三人の男が居たでしょ？あいつらの事気にならない？」

驟雨は驟雨なりにボケてみたのに突っ込んでくれなかった里奈に不満を少々、持ったが……言われたことも理解できたので考えてみた。確かに、自分が三人も川に落とせたのは不思議なことである。まあ、元から不思議少年ではあるが……。

「普通、あの三人には普通の人間が触れることも出来ないはずなのよ……いや、姿を見ることも出来ないはずだったわ。」

「そう？でも僕には見えてたよ？」

「だからおかしいって言ったのよ。」

「成程……。」

妙なところで納得している驟雨にやれやれと思いながらも里奈は話を続けた。

「あの三人は天使なのよ。天使は悪魔を倒したいみたいね。」

「ああ、天使と悪魔は中が悪いって話は良く聞くね。犬猿の仲って奴か・・・どっちがサルでどっちがイヌだろ？」

「・・・はあ、まあ、それはいいとして、驟雨、貴方・・・天使なの？」

「いや、人間じゃないかな？自分では人間だと思うけど？」

「そうよね、人間よね？でも・・・あっさり三人を川に落とすなんてね。ま、今のところはこれでいいでしょ？驟雨、この町を案内して。」

デートである。因みに少年の場合は初デートであるというべきだ。生まれてこの方、歩いたことのある女の子は家族か、親戚、もしくは遠足のときにたまたま隣となった女の子ぐらいである。驟雨はそれが誰だったか既に忘れている。幼馴染がいるのでは？いや、因みに彼の幼馴染は男なので・・・ある意味、残念だ。

「まあ、わかったよ。この町を案内すればいいんだね？」

「ええ、お願いするわ。この町あんまり知らないし・・・それに・・・私は・・・。」

「それに・・・？」

そのまま里奈は黙り込んでしまった。一応、書いておくと里奈は方向音痴である。これまで迷った回数は数えきることはいらない。

「別にいいじゃない！！さ、行きましょう！！」

「え、あ・・・うん。わかった。」

里奈に引きずられるように驟雨は公園から姿を消した。そして、驟雨は里奈とともに町へと繰り出したのであった。運命というものが存在しているのなら、運命だったのだろう・・・驟雨と里奈はそこで運命的な出会いを果たしたのであった・・・。

「あ、川の三人だ。」

「・・・ほんとね？しかし、驟雨は呑気そうでいいわねえ。」

昨日の三人とぼったり出会った驟雨と里奈であったが、三人は既に戦闘体勢にでも入っているようであった。目がマジだ。

「・・・驟雨、ここで力を見せなさいっ！！貴方が天使なのか悪魔なのか計ってあげるわ。」

「って、どうやって調べるだあ！！僕は人間だと思うぞ！！」

ここで少年が何かの特殊能力でも披露すれば物語は進んだのかもしれない。しかし、驟雨はこの場でアルマジロ・・・失礼、主人公にあるまじき行為をとった。

「里奈、逃げるよっ！！正面からは無理！！人間には天使の相手は無理！！」

「え、何言ってるの！」

無い尻尾を巻いて里奈を右手に逃げるコマンド。回り込まれることも無く（三人はあわてて追いかけたが、驟雨の逃げ足の速さに追

いつくことなど出来なかった。)見事、町の人ごみの中へと姿をく
らますことが出来た。人ごみの中を通り、先程の公園へとたどり着
く。ここは近くに幼稚園が無いので小さい子はいない。

「驟雨！何で戦わないで逃げるのよ！！しかも逃げ足速すぎよ！！」

「いや、無理！！戦うの無理だって！一般人には無理だよ！！武器
持ってるわけでもないし。・・・そりゃ、不意を討てば勝てると思う
けど、正面なんて無理だよ！！」

どちらかというと姑息な手を好む、卑劣なモンスターみたいな感
じを受ける主人公だ。熱血漢だったら自分の身を返りみずに敵に踊
りかかっていたに違いない。だが、驟雨は違う。侍派よりも忍者派
な男なのだ。武士道？ありえないね。

「・・・まあ、それは驟雨が普通ならしょうがないけどさ、驟雨、
貴方は私が保証してもいいわ、貴方は人間じゃない！！」

「ガビーン！！」

「うわ、口で言うなんて・・・そんなにショックだったの？」

人間、誰でもお前は人間じゃねえといわれればそら、ショックで
ある。特に人間以外の人から言われたら・・・それに、驟雨の場合
は人間以外のもの、つまり、人間以外だが、それが何なのか分から
ないといった感じである。

「・・・シクシクシクシク・・・」

驟雨が涙を流しながら土をいじっていると、あの三人が現れた。

「……見つけたぞ、悪魔め!!」

「リーダー、見せ場ですからここは名乗りましょう!!」

「そうですよ!!これぞ、悪役の華です!!」

自分たちで悪役とっていたら世話ないが、まあ、自分たちから言っているのでもいいだろう。天使といえども、悪い奴は悪いのだ。

「リーダー、阿木!」

「隊員一、馬場!!」

「隊員二、朝次!!」

略してABCコンビでよからう。はい、見せ場終わり。

「……そういえば、何で里奈は追いかけてるの?」

「悪魔だから。それ以外なんて無いんじゃない?」

「そうなの?」

ここで、見せ場をくれとばかりにAが会話に入り込んでくる。

「ふふふ、少年、この世はまさに悪魔と天使の戦場なのだよ。われわれ天使は善だ!!そして悪魔は悪なのだ!!」

「「流石、リーダー!!」」

そのような一方的な解釈に里奈はイラついた感じを表したが、表ただけで特に何もしなかった。だが、未だに腐っている驟雨の肩に手を置いた。

「・・・驟雨、一つ、言わせてもらうけど・・・貴方が何者かを知りたければあの三人に正面から突っ込んでいきなさい。もしも、やられてしまえば貴方はただの人間だからね？大丈夫、敵はとってあげるわ。」

やられてしまえばのやの部分は感じて置き換えたらしかしたら“殺”↑なのかもしれないが、驟雨は立ち上がって涙を拭いた。やられること前提である。

「そうだね、ここで僕が見事殴り倒されるなりなんなりすれば僕は人間なんだよね！」

驟雨は無謀にも三人のところへと突っ込んでいった結果、彼、里奈の期待通り、ぼこぼこのべこんべこんにされて今ではモザイクがかかるまでになってしまった。

「ふふふ、所詮、人間なんぞこの程度よ！！笑わせてくれるわあ！！」

「雑魚があ！！顔洗って髪洗ってトリートメントもついでにしてこいやあ！！」

「ドライヤーも忘れんなよっ！！」

そんな感じに調子に乗っている天使三人組に悲劇が訪れる。その

日、その場所、その時の天気は確かに、晴れであった。場所が公園でしかも関係者以外誰も居なかったから良かっただろう。調子に乗っているときは要注意だ。

突然、雲が出てきて紅い、雷が驟雨に落ちた。

天使三人はその衝撃に押され、その場に土下座状態にまでモードチェンジすることとなった。

「ぐ、体が勝手に服従モードか!!」

「リーダー、やばいですよ!!ここはタオルを投げてください!!」

「審判、ギブアップ。これ以上は無理だ。」

その日、一人の少年は紅い、羽根を広げた。それは見事とは言えないほど、醜いものであったが、怒りに燃えるものにはちょうど良かったのかもしれない。

「・・・くそっ、僕は、僕は人間だ!!貴方たちとは・・・チガウッ!!」

いや、個人的に同類だと思う。そして、少年は恨みがぎっしり詰まってそうな一振りの剣を掲げ、土下座して謝ってそうな三人のものとへと突っ込んでいった。

「「「ぎゃあああああ!!おたすけえ!!」」」

そして少年はこの日、この場所、この時に・・・もしかして自分は人間じゃないのではなからうかと一瞬だけ思ったのであった。

そして里奈はそんな変わった少年を見てこれは凄い逸材だ。ぜひとも、敵に回さないようにしようと心に誓ったそうだが、彼女の場合、意外と忘れっぽい性格なのでもしかしたら忘れてしまうかもしれない、十分後ぐらいに……。

三、

驟雨が紅い羽を生やしたその日の夕方、里奈と共に彼の自室でごろごろしていた。驟雨のその後はまるで蒟蒻みたいにふにゃふにゃになってしまい、里奈が引きずって持って帰った。お湯を掛けて三分後に復活したらしい。因みに書き足しておくが、あの三人は驟雨が手加減したので気絶するだけですんだ。

「驟雨、大丈夫？」

「……僕は、やっぱり……人間じゃないのか？」

ここで里奈は元気の無い驟雨を励ますことにした。頭の中で励ましの言葉を揃えてみたのだが……

「大丈夫、見た目は人間だよ！！誰にもばれないって！！」

「……そう？」

「それに、力使わなきゃ見た目は今まで通りだし？ほら、人助けでもすれば？」

悪魔がそんなことを言うのは本末転倒の気がしてならないが、意外に優しい悪魔だったのかもしれない。まあ、人それぞれの考えなのだろう。

「……ね、元気出して？」

「・・・うん、ありがとう。」

男は大体、綺麗な女の子から励まされたら元気になるものだ。勿論、女の子の知り合いが少ない驟雨には効果覲面である。そして、そんな驟雨の元へ・・・

「驟雨、賢ちゃんが呼んでるわよ？」

と、母親からお呼びがかかったのであった。驟雨は当然のように里奈の事をどうしようかと思ったが、里奈は首を振って遠慮した。

「大人しく待ってるからさ？用事があるなら行ってきなよ。」

「そう？なら行って来るから、へんなことしないでよ？」

「わかった。しないしない！！」

特大の笑みを浮かべる里奈に極上級の不安を抱えながらも驟雨は階段を下りて自分と呼んだ幼馴染と顔を合わせた。

「やあ、驟雨。これから家に来ないか？」

これが女の子のお誘いだったら良かったなあと思いつつも驟雨は頷いた。これも一概に、里奈の事を信用していたからである。いい奴だ。そんな奴は騙されやすい。少しは疑心を持ったほうがいいと思われる。まあ、不安だったが・・・。

「・・・わかった。」

驟雨は母に幼馴染の家に行つてくると告げて家を後にした。その光景を里奈は驟雨の部屋の窓から覗いており、ククク・・・と、なんとも悪魔っぽく笑っていたのであった。

「さあて、これから住む家だから相方さんの趣味を調べようっと！
！さあて、『アレ』は何処に隠してあるかな？ベッドの下かなあ？」

あれといったらあれである。それ以外、ありえない。まあ、里奈がそんなことをしている間、驟雨は幼馴染、霜崎 賢治のお屋敷へと遊びに行った。とりあえず、お隣さんが遠く、長い道のりである。豪邸なのだ。金持ちなのだ。

二人して部屋に入り、何かの儀式のように将棋を取り出す。

「久しぶりにやるか！！」

「やろう。」

二人は将棋を始め、約一分で賢治の勝ちとなった。驟雨は一度も賢治に勝ったことはない。ジャンケン、かけっこ、ボクシング・・・勝負事には一度も栄光の記録は無いのだ。

「いやあ、やっぱり賢治は強いなあ。」

「はは、驟雨が弱すぎるだけだよ。驟雨は何でも弱いからね。」

さらっと酷い事を言いながら賢治は更に話を進める。

「・・・驟雨、この世には人間以外に天使と悪魔が居るんだ。知ってた？」

「うん、知ってるよ。」

「そうか、なら・・・いいんだけどね。いやあ、実はさあ、僕、人間じゃないんだ。」

てへっといつてのけた賢治に対して驟雨は驚いた。当然だ。

「え、そうだったの？」

「・・・いや、ここで普通はじょうだんだろうって聞かない？」

「あ、冗談だったの？」

「・・・本当だけどね。まあ、君がこんな奴だったのは小さい頃から知ってるけどさ、うちはね、代々・・・天使側だったんだ。今は妹が首長をやってる。」

「ああ、名前、なんていったっけ？」

驟雨は以前、あったことのある賢治の妹を頭に描こうとしたのだが、思い出せなかった。賢治が妹ではなく義妹が良かったと呟いており、そんな妹がいたら自分もうれしいなと思っていた驟雨である。意外とロリコンなのかもしれない。

「妹かええなあ、僕にも居るかもしれないけど・・・。」

いや、驟雨はロリコンのようだ。

「驟雨、メイドもいいぞ？」

「そうだね、メイドもいいね!!」

どうやら、こいつらは欲張りさんの様だ。そんな欲張りさんはいずれ、苦しむ。

「なら、驟雨・・・同級生は？」

「いや、それはちょっと・・・想像しにくいかな。ありきたりだし・・・。」

「成程・・・一理あるし、そうだな、同級生は却下だな。」

男二人、何か通じるものがあるのだろう・・・そこで二人は頷きあつて手を組んだ。その目には涙を浮かべている。一体、何の話をしているのやら・・・。

「・・・僕にも義妹欲しいなあ。」

「そうだな、妹じゃなくて義妹だなっ!!」

二人で盛り上がっていると、扉をノックする音が聞こえてくる。驟雨は誰だろうと思ったが、賢治はそのノックの回数になにやらかたりがあるようだ。

「驟雨、急いでここに隠れてて!」

「え? わ、わかった。」

賢治にそういわれて驟雨は机の下に押し込まれる。そして更に、机の下には扉があり、人一人分は入れるスペースが存在していて、

驟雨は押し込まれる。

「・・・お兄様、今誰か居ませんでした？」

驟雨は暗いスペースに居るので部屋に入ってきた相手が誰だか分からなかった。それに対して、賢治は入ってきた相手の質問に答えるような感じで辺りを見渡す。

「ああ、僕の友達が来てたんだよ。今ちょっと、トイレに行ってるけど。そんなことより、君は自分の部屋で今後の対策でも何でも立ててるといい・・・僕は久しぶりに来てくれた友達と色々話すところがあるからね。」

まあ、話すとしても趣味の話だけだ。なにやら、この二人の仲の悪そうな雰囲気を感じる驟雨であったが、相手にばれないように黙っていた。

「お兄様、悪魔はもうそこまで迫っているのですよ？『クリムゾン』の存在も更に確認されたと聞きました。何も呑気に遊んでいる場合ではありませんの！」

「ふふ、それは君が遊べないだけであって、僕には関係ないことさ。さ、行った行った。君はちよつと仕事熱心なだけさ。僕みたいな性格になると楽になるよ。それに、そんなことを言うために嫌いな僕のところに来たのかい？」

「・・・いえ、これを渡すために来ただけです。お父様が渡せと申しましたから・・・失礼しました。」

挑発気味の話し方に相手は頭にきたのかさっさと扉を閉めて出て

行った。少しばかり経ってから机の下のスペースから驟雨が顔を出す。

「いやあ、さっきのは僕の妹さ。全く、可愛くないったらありやしない。そうだ、驟雨、お詫びにこれをあげよう。新開発の薬さ。」

賢治に手渡されたものはビンに入っている紅い錠剤である。驟雨はそれをしげしげと眺め、

「……なんかやばい薬？それなら僕は遠慮させてもらうよ。まだ、人生に悲観したくないから。」

「違うさ、これは安定させる薬……そうだね、簡単に言うところの世界での自分という存在を確立させるための必要不可欠な歯車ってところかな？」

「??.?」

驟雨は賢治が言っていることがほとんど理解できなかったため、紅い薬を眺めるだけとなった。驟雨の頭の中では必死にその内容を理解しようと努力しており、そろそろ、頭の中の原子炉が限界を超えようとしている。

「まあ、精神安定剤だと思ってくれればいいよ……ほら、頭を冷やさないと……。」

頭から煙を噴出している驟雨の頭の上から如雨露を使って水を与えていた賢治だが、紅い薬を一錠取り出し、驟雨に渡した。

「とりあえず、一つだけ飲んでみたらどうかな？騙されたと思って

さ。」

「・・・そうだね、安全なら一錠もらうよ。本当に大丈夫？」

驟雨はその薬を貰って飲んでみた。本当に騙されるかもしれない。

「・・・？」

「ま、そうそう効き目があるわけ無いよ。それに試作品だしさ。」

驟雨が何かを言おうとすると、再びノックの音が聞こえてきたので驟雨に今日は日が悪いようだと言え、賢治は驟雨を帰らせることとした・・・窓から。

「じゃあね、驟雨。くれぐれも体に異変があったら医者に行くんだよ？」

「なら、飲ませないでくれよ。しかし・・・危なくないのだろうか？」

もっともなことを呟いて驟雨は窓から垂れたロープを使って逃れたのだった。

四、

家に帰りつくと、部屋は散らかっていた。汚くなった部屋のベッドの上に里奈が苦笑いをしていながら座っていた。ベッドもぐちゃぐちゃである。

「はは、お早いお帰りで・・・。」

「・・・里奈、何してるのかな？散らかすのにも限界ってもんがあ

るよ？ ことと場合によつては僕の家から追い出さないといけないからね？」

驟雨にそう言われ、里奈は真実を話すことにした。彼女の言い分はこうだ。驟雨の趣味を知るために、驟雨がどこにあの本を隠しているかと探していたが、意外と隠すのが上手でなかなか見つけれなくて疲れて座っていた・・・そうだ。

「・・・普通さ、初めて来た人の家ではさすがにそんなことしないでしょ！ 里奈、なに探してるの！」

「うう、ごめんなさい。まさか、無いとは思わなかったから・・・」

隠すも何も驟雨の家は本屋さんだからそんな本はいくらでもある。店番を頼まれたとき客が一人も来てないときにこっそり読んだりもしている。つまり、部屋に置かなくてもどうと読めるところに驟雨は住んでいるのだ。ある意味、羨ましい・・・。まあ、こっそり部屋に隠してもいるが・・・。

「まあ、謝ってくれたからいいけどさ、もうこんなことしないでね？」

「わかったよう。二度としないからさ・・・。（驟雨が居るときはね。）」

里奈が一応大人しく謝ったので驟雨は許すこととした。しかし、まだ里奈が家に住むことは確定していない。家族にばれれば一発で追い出される可能性が無いでもない。驟雨はそれをどのようにして克服するか頭の中で考えていた。だが、あまり考える余裕は無かつ

たようで・・・お店のほうから驟雨を呼んでいる母親の声がまた聞こえてきた。

「驟雨、ちょっと来てくれない？話があるわ。」

「え？はい！！・・・里奈、出来れば片付けておいてくれないかな？ちよつと行ってくるからさ・・・。」

「わかった。片付けておくね？（チャンス！！）」

里奈は驟雨に対してそういうと、驟雨が見えなくなるのを確認して再び、宝物探しの冒険を続けるのであった。勿論、今度は驟雨が帰ってくる前に片付けをしている振りをしなくてはいけないのだが・・・。

母親から呼ばれた驟雨は台所にて母親から話を聞いていた。ずばりそれは里奈の事であった。どうやら自ら母親の元へといったらしい・・・。

「驟雨、先程・・・あなたのお友達がこの家に住まわせてくれつつてきたわ。」

驟雨は何をやってんだ、あの物色悪魔は・・・と思いながらも黙ってその続きを促した。フォローを入れたほうがよさそうだと思うながらもその機会を狙う。

「だけどね、この家が狭いのは知ってるでしょ？」

「うん、知ってる。」

「あの子が貴方と住むことはなんら反対無いわけよ。聞けばあの子、

今まで独りで生活していたらしいじゃない？町の不良たちに絡まれているところを貴方に救ってもらったって言ってたわ。まさか、貴方みたいなへたれが助けられるわけ無いと思うけど・・・だけどね、残念ながら、今日の夜ぐらいにこの家におにいちゃんが帰ってくるのよ。つまり、この家に住んでもらうことは無理ね。」

驟雨には何人かの兄弟がおり、ほとんど家にいるということはない。皆何処かの親戚とかの家に住んでいるので会うのは正月ぐらいとかの行事のときぐらいなのだ。しかも驟雨は未だに自分の兄弟が何人居るのか知らないのだ。

「まあ、そういうわけで、貴方が遊びに行っている間、住む場所をお父さんと一緒に探し当てたわ。ほら、ここよ・・・。」

驟雨は何がなにやらわかんなくなってきたが、母親が提出してきた書類に目を通してみた。

「ここなら、この家から近いし、学校にも不便ないわ。さ、引越しやさんはもう直で来るから、今のうちに身の回りの生活用品ぐらい集めておくのよ？」

「・・・え、僕がその場所に里奈と引越すの！！」

「そう、貴方と里奈ちゃんが引越すのよ。驟雨、幸せになりなさい。」

どうやらこの母親はかなりの勘違いをしているようだと思っただが、この母親に間違いを教えるのは自分には到底無理だと諦めて何故、そのようなことをしたのか最後に聞いてみた。

「……それはね、貴方にも独り立ちをしてもらいたいからよ。お兄ちゃんたちは今の貴方の年頃で皆巣立って行ったわ。これぞ、独り暮らしの第一歩ね。」

何かをうつとりと見ているような視線を驟雨に見せて母親は言った。もうこれ以上何を話しても無駄のようだと思ってしまった驟雨は仕方ないので二階に居る里奈に引越さなくてはならないことを告げるために足を引きずるようにして階段を上っていったのであった。

「……里奈、今度は何やってんの？」

「あ、意外と戻ってくるの早かったね……あは、あはははは。」

驟雨のパンツを伸ばしながら遊んでいる里奈を見て驟雨はため息をもらした。驟雨はどうやらこの少女と出会ってから何かが軋みをあげて外れていつているようだと思うのであった……。

里奈に引越すことを告げて直に引越し屋がやってきた。『刹那引越しや』はまさしく名前の通りに行動を開始して元から物が少なかった部屋はしょぼいフローリングが姿を現した。勿論、本格的な家探しを引越し屋に混じって行っていた里奈は男の子が隠れて読んだような本を見つけることなど出来なかった。

「驟雨、本当にエロ本持っていないの？」

「え……う、うん。持っては無いよ。それに、あんまり興味持っていないから……。」

確かに、もっては無いが見たりはするのだ。驟雨の目は右に左にバタフライ。そんな驟雨なので里奈の目は怪しいものを見る目に一

気に染まった。

「へえ、本当にそういうのに興味ないの？」

「う、うん……。」

「へえ、そうなんだあ？」

スカートの先から太もをちらつかせながら驟雨の視線にわざと捕まるように見せている里奈であった。驟雨は顔を真っ赤に染めながらもなるだけ、見ないように顔を反らしたりもしていた。そして里奈は驟雨に引っ付く。

「ほらほら？」

「……。」

真っ赤に染まって煙を出し始めた驟雨に満足したのか里奈はにやりと笑った。

「この嘘つきさん？」

「ぐ、だ！誰だってそんなことされりゃあ、そうなるに決まってるでしょ！！！」

手をぐるぐる回して反抗している驟雨に笑いながら里奈は答える。

「はは、それなら早く私たちの新居に行こうよ！」

「……。全く、新居でもなんでもないでしょうに……。たまたまだ

ろうに・・・。」

ぶつぶつ文句をたれている驟雨の腕を掴んで階段を下りていく里奈の顔は底抜けに明るかった。驟雨も悪魔とは全部が全部悪者ではないのかもしれないと思い始めていたのであった・・・。。まあ、それ自体が先入観だろう。

「・・・また、あの三人が襲ってくるかなあ？」

「さあ？そんなときはまた、驟雨が護ってくれるんでしょう？私より強そうだし。」

女の子に頼られて嫌な奴はそう、いないが・・・出来るだけ驟雨は自分が傷ついたり相手が傷つくようなことにはなって欲しくなかった。この世に争いがなくなればいいと思っている少年だからである。

「・・・ちょっと、母さんに挨拶してくるよ。まあ、どうせ家から近いんだけどね・・・まさかこんなに早く独り立ちをするとは思わなかったよ・・・。。。」

「二人立ちだけどね・・・。」

驟雨はくるくる回っている里奈のため息をついてから母親の元へと向かって今から引越すことを告げた。

「そう、これから貴方の新しい生活が始まるのね？驟雨、あの子を泣かしちゃ駄目よ？」

「母さん、里奈は僕の彼女じゃないよ・・・。。じゃ、もう僕行くか

らね？」

母親は頷いて笑顔で送り出してくれた。父親は店番をしているので出てきてはくれなかったが、

「若さゆえの過ちだけは気をつけろよ？」

とだけ言ったのであった。そのとき、驟雨は初めて父親に対して反感を抱いたそうだ。

地図を持って近くを歩いていくと、古ぼけた感じのアパートを発見することが出来た。悲劇が起こって入居者が減ってしまったのでは？と思われる。

「……驟雨、お化け出るかな？」

「……出るんじゃない？風呂場やトイレなんか……びつちり……」

とりあえず大家さんが住んでいる場所を見つけてそこに辿り着く。一回の一番右の部屋に住んでいた。このアパートは三階建てで、屋上まであるようであった。意外と大きいほうかもしれない。驟雨はその一つの部屋の前に立ち、ノックした。

「すいませーん、今日引っ越してきた坂風ですけど？」

「ついでに、里奈も居るわよ？」

「……はいはい。」

中から出てきたのはぐるぐる眼鏡をかけてぼさぼさ髪を後ろでひ

つつめている男性であった。髭も剃っていないのか生え放題である。二人は一步、退いた。

「・・・ああ、今日入ってくるっていうカップルさんね・・・どうぞ、貴方たちの部屋はあっちですから、勝手に入って好きにしてください。先に言っておきますが、貴方たち以外にほとんど人は住んで居ないから、夜中以外なら別に騒いでも構いませんからね・・・それでは・・・今後よろしくお願いします。」

成仏する幽霊のような感じで大矢さんは扉をぎぎーっとしめた。いつも間にか二人が住む部屋の鍵を驟雨は握っていた。

驟雨は何故、自分が部屋の鍵を握っているのかかなりの不思議を感じたが、追求しないようにした。

こうして、自ら悪魔を助けた少年と助けられた悪魔はおどろおどろしている管理人が巢食う、怪しげなアパートの住人に晴れてなってしまったのであった・・・無論、二人が誰かに金縛りにあったように動かなくなったのは言うまでも無い。

五、

このアパートに住んでいるお化け的扱いの管理人の姿を確認してから数分が過ぎてようやく二人は動き始めた。だが、まだぎこちない。

「り、里奈・・・怖かったね？」

「そ、そうね・・・なんだかここにいると何かに取り付かれそうだから早く部屋に行くわよ。」

驟雨と里奈はロボットのような機械的な動きを行い、言われたとおりの部屋に鍵を開けて入った。中は意外と綺麗で広かった。既に驟雨の部屋から運び込まれたものはそろっており、一応は生活が出

来るようになっていた。

屋上もちょうど日当たりがよく、花壇なんかも備え付けられており、綺麗な花が咲いていた。驟雨はその花があの人管理人の趣味なのだろうかどうでもいいことを考えていた。もう一人は屋上を走り回っており、嬉しいのか反復横とびを残像が残るような速さではじめたのであった。

「・・・ねえ、悪魔と天使って一体・・・何？」

「悪魔と天使？ああ、それね・・・悪魔は悪魔で自分たちの理想を持ってて、天使は天使で理想を持っている・・・両者の考えがまず間違いないく、交わることはないって言われてるけど、そうは思わないんだなあ。悪魔は基本的に人助けなんかをしない性格で、忠告だけってところかな？それが同じ悪魔でも忠告しかないの。それで、天使はその真逆。度の行き過ぎたぐらいの御節介を相手に焼くし、自分の危険を省みずに仲間と認めたものを助けるの。簡単に分けるならそういうところかな。もう一つ、第三勢力みたいなのがあって、それはちょっと未だに分からないの。ま、生活していくうちにまた天使なんかにあつたらもっと詳しく話せると思うから、そのときを期待しててね。」

驟雨はもしも自分たちの目の前に天使が現れたらどうせ戦わなくてはいけないだろうと思っていた。それなら、話を聞いている場合ではない。黒い羽を出して宙に浮かんでいる悪魔を眺めながら今後の自分の運命とやらを感じようと努力して見たが、無駄であったことは言うまでもない。

「・・・ま、しょうがないのかな？」

そろそろ夕方で、今までは母親が作ってくれたのだが・・・これ

からは自分で作らなくてはいけない。目玉焼きぐらいなら出来るが、毎日それでは正直言っただけならいいと思われ。そこはそれとなく悪魔を頼りにしてみることにした。

「里奈、君は・・・料理とか好きかな？」

「うーん、食べるのは好きだけど、作るのはからっきしね。」

里奈がどうやら頼りにならないとわかってしまった驟雨はとりあえず自宅に戻って簡単に出来る料理の本を借りてくるしかなかったのであつた・・・。

そして、材料などを購入するために町へと行くことになった。今日の献立はサンドイッチのみ。それ以外はちよつと不可能である。

「何を買うの？」

「パンと野菜。後はハムとかかな？まあ、里奈もサンドイッチぐらいは作ったことあるよね？」

かなり心配しているような感じで驟雨はたずねた。たまにいるのだ、サンドイッチも作れないぐらいの料理おんちが・・・。

「大丈夫だって、パンに材料をはさむぐらいなんて朝飯前だよ。」

「そうだよ、パンの中に挟むだけだからそんなことは無いよね？」

自分の中に生まれてくる不安要素をかき消しながら驟雨は自分の中で里奈を信じようとがんばってみた。今日会ったばかりだが、信用してもいい人間であると驟雨は思っているのであつた。

しかし、その期待は見事に裏切られることとなるのは致し方なか

ったことかもしれない。

材料を買い終え、アパートへ帰る途中に買いもらしがあることに驟雨は気がついた。

「あ、ちよつとは向かってくるの忘れてるから買ってくるね？先に作っててくれないかな？」

「わかった。いってらっしゃあい！！」

買い物袋を全て里奈に任せ、驟雨は急いでハムを買いに行った。ここでも、驟雨の運命を変えたであろう、選択肢が存在することを知らずに……

早急にハムを買い終えた驟雨は胸騒ぎがしたので急いでアパートへ帰還するために夕日に染まっている街を走っていた。自転車もあったが、里奈がいたので乗って来てはいない。驟雨はハムを抱えて走っていたが……途中の公園でなにやら騒がしげな音がしたので覗きこんだ。一瞬だけだが、なにやら人間じゃないものがいたような気がした驟雨は、公園を覗き込んだ。

「里奈？じゃないよね……なら、誰だろう……。」

そこには黒いマントを纏っている男か女かさっぱりわかんない怪しい人が数人、一人の少女を囲んでいた。今から儀式でも始めるのだろうか？

「……ち、邪魔が入ったか……。」

黒装束の一人がそうつぶやくと、数人の人数で今度は驟雨を取り囲む。一人は未だに少女を抑えているようである。少女は何かの葉で眠らされているのか知らないが動こうとしない。

「……魔神を呼び出す邪魔をした代償をお前の命で償ってもらうぞ!!この天使め!!」

「え……?」

驟雨はなにやら自分が及び出なかった状況に首を突っ込んだのを悟り、公園から出ようとしたが囲まれてしまった。

「く、なんか知らないけど誰か助けに来てくれないかな?」

無駄な望みだと思いながらも驟雨は誰かに助けを求めた。試しに里奈に心の中で助けを求めてみる。

その頃、里奈はサンドイッチを作っていた。よほど楽しいのか鼻歌まで出ている。

「ふふーん、これでよしと……さあて、今度はあの材料を鍋で煮込んで……」

何故か鍋を取り出してきて色々ぶち込んでいる。大丈夫であろうか?鍋からは謎の光が出ており、出来上がったサンドイッチは自分で動いている。まあ、当然のように驟雨の助けは里奈が一生懸命にサンドイッチを作っていたので気づくことも無く、無視されてしまった。

無視されてしまった驟雨はま、そんなの当然かとさしも傷ついていない様子で辺りの黒装束をにらみつけることもなく、ただ呆然と眺める。彼が熱血少年であつたらここで

「お前ら、その少女を放せ!!」

といっただろうが、驟雨はそこまで熱血でもないのだ、ぼーっとその場に立っていただけであった。そんな彼の相手は驟雨の事を天使だと思って警戒している。

両者一步も動かない間、そろそろ夕日は沈み始めていた。驟雨は早く帰らないとんだかやばそうだと思いながら相手の隙を伺う。

一人の黒装束がとうとう、驟雨に襲い掛かった。が、驟雨は距離があつたので容易に避けることができた。そして、なんとくそんな相手に蹴りを繰り出してみた。まあ、襲ってきたのはあちらなので正当防衛だ。と驟雨が思ったときに彼の中の何かが壊れた。

「うおおおお！！」

その日、その公園を遠くから見ていた一人の老人はまるで完熟トマトが破裂したようじゃったといっている。

「はぁ・・・はぁ・・・」

驟雨は強烈なストレス的要因を放出し、なんだかすっきりしていた。

どうやら、驟雨のストレスが爆発しただけであつたようだ。だが、そのストレスは明確に力として放出され、黒装束の人影はすべてその場に倒れていた。ついでに言うなら驟雨が運がよければ助けようと思っていた少女は他の黒装束よりも遠いところに飛ばされており、どうやらブランコの鉄柱に体をぶつけたようだ。ブランコは鉄柱が曲がっている。

「・・・・・・・・」

驟雨はとりあえずその少女が生きているか確認し、息をしていたので急いで携帯から消防署に連絡した。

「もしもし！すいません、公園で何かあったようですので、救急車をお願いしますか？人が何人か倒れているんです！え、何でそうなったか分かりますかって言われても・・・ちよっと、僕には分かりません。」

驟雨はまさか自分がやりましたなんていうわけなく、白を切った。それから三分後、公園には救急車が現れて少女他、黒装束たち六人は増援に來た救急車によって病院に運び込まれたのであった・・・驟雨はその場で軽い事情聴取などを受けたが、途中で逃げるようにして家に帰った。

家に帰りつくのが遅かったのか、アパートの外からは謎の煙が驟雨と里奈が住む予定のを満たしていた。

「里奈！！何これ！！」

「あ、おかえり」

煙の中から出てきた里奈はその煙を噴出している現況の鍋を持ってきて驟雨に自慢しているような感じで見せた。驟雨はそれを見てなんだろうと思った。

「何に見える？」

里奈に自信満々に言われ、驟雨はそれが何か真剣に考えてみた。カレーはどうだろうかと考えたが、自分たちの夕食は確か、サンドイッチだったはずだと思い出して、再び考え始めた。

「ぶぶー！！時間切れ！！答えはお味噌汁でした！」

嬉しそうにそういう里奈を見ながら、驟雨はため息をついた。どうやら、今日の夕食は少ないサンドイッチになりそうだと思いながら、里奈に告げた。

「里奈、お味噌汁はサンドイッチに合わないと思うから・・・僕は遠慮しておくよ。食べたいなら自分で食べなよ？」

驟雨はそういつて自分の分のサンドイッチを作り始めたのであった。

「ええー！！折角、お友達のしるしに私が驟雨のために作ってあげたのい！！」

驟雨は里奈にそういわれて良心が少しばかり痛んだ。自分のためにといわれたらそれはそれで嬉しいし、がんばって作ってくれたのだからそれなりに対応してあげないと思っただけだ。例えばそれが、謎の液体であっても・・・

「わかった、覚悟は決めたから・・・いただきます！！」

驟雨はそれを一気に口の中に飲み込んだ。

「あ、一応忠告しておくけど、味の保障は出来ないから・・・ちよ、驟雨！！」

悪魔は、忠告だけはした。だが、その忠告はどうやら遅かったようだ・・・驟雨は足の震えと頭痛にさいなまされてその場に倒れこんだ。口からは黒に染まってしまった泡を吹きながら目を回している。

そして、その頃・・・公園で倒れていた少女は家族が見ている

のに気がついて目を覚ました頃であつた……。

五、

驟雨はあの後、かなりの頭痛を覚えたが、市販の薬を飲んでだいぶ楽になった。今では足の震えも収まっている。

「……里奈、今度から料理は僕が作るからさ……里奈はほかの事をやってくれないかな？」

「他の事って？」

「うん、黙って食器を並べたりしてくれたら料理をしている僕としてはかなり、嬉しいな……。」

驟雨も決して料理がうまいほうとは言えないが、里奈よりはましであろう……。驟雨が鍋を焦がすぐらいの腕前なら、里奈の場合は鍋の中から何かの化け物を作り出してしまいそうである。

「驟雨がそういうなら分かったよ。」

「うん、理解してくれて嬉しいよ……。」

素直でいい子だと驟雨は思い、里奈には絶対に台所に立たせないと誰かに誓った。外は既に夜で、材料もほとんど残っていない二人の食卓には出前の寿司とハムがのっていたのであつた……。

「すしおいしいねえ。」

「……そうだね。」

複雑な心境で驟雨は寿司を口に運ぶ。目の前では驟雨の二倍のス

ピードですしを食べていく同居人がいる。

そして驟雨は先程の事を思い出して聞いてみることにした。

「里奈、悪魔ってやっぱり黒い服なんて着るものなの？」

「・・・ん？」

里奈は口の中いっぱい広がっている寿司のおいしさをゆっくりと味わってから、驟雨の質問に答えた。

「そうだねえ、悪魔にもそれぞれ派閥ってもんがあるからね・・・まあ、いるといえはいるけどね。」

「何かの儀式なんてするもんなの？」

その質問にううんと唸りながら里奈は答える。

「うん、やるねえ。儀式にはそれ相応の準備があって、その準備を邪魔されたらそれこそ、問題って奴だね。もしも儀式中に部外者なんかが入っていったら教われるだろうね？」

ああ、だから襲われたのかと驟雨は理解し、再び寿司を口に運ぼうとしたが・・・突然携帯電話が鳴り出したのでそれどころではなかった。

「里奈、少しぐらいは残しておいてよ？」

「ははっはあ！！」

何を言っているのか分からないぐらいに口の中に欲張って寿司を

ほおばっている悪魔にため息をついて驟雨は携帯電話のコールボタ
ンを押した。ディスプレイにはそれが友人からのものと知らせてい
る。

「何、賢治？」

『ああ、どうやら・・・君にうちの妹が世話になったようだからさ、
お礼をしたくてね。今から妹が君に会いたいって病院で行ってるん
だ。どうかな？』

驟雨は里奈のほうを見ると、里奈はすでに最後のイクラを口に運
んだところであった。

「ばぶう!!」

『どうした、驟雨？』

「・・・いや、なんでもないよ・・・わかった、今から病院にいけ
ばいいんだね？」

電話を切って里奈にちょっと出かけてくると伝えた。里奈は満腹
なのか眠そうである。

「直帰ってくるから、テレビでも見てていいよ。」

「驟雨、早く帰ってきてねえ？」

驟雨はちよつと帰るのが遅くなるかもしれないと思いながら（そ
れは里奈が夕食を残らず食べてしまったからである。驟雨はラーメ
ンでも食べに行こうと考えている。）

病院は近いのでそこに行くと、病院の前に賢治が待っていた。

「やあ、早かったね？」

「ちょっと引越ししてね。ところで、僕が賢治の妹さんを助けたなんて・・・何かの間違いじゃないか？」

「さあね？本人がそういつているんだから間違いないんじゃない？とりあえずあってくれれば分かると思うよ。」

通された病室には一人の少女がベッドに座っていた。肌は白く、はかなげな感じを受ける少女である。

「お兄様、その方が・・・。」

「そう、君を助けてくれたっていう、君が軽蔑していた『クリムゾン』の少年だ。」

「・・・そう、なの・・・。」

一人話がさっぱり分からない驟雨はぼさっとその場に立っているしか手段が無かった。少女はベッドから降りて、驟雨の前へと立つ。背は短いので近くに立ったら驟雨は見下ろさなければならぬ。その顔を見て驟雨は賢治に小声で聞いた。

「賢治、意外と可愛い妹さんじゃないか？この子で文句を言ったら神様から罰が当たるぞ？」

「十人十色さ・・・僕の妹をどう思うかは人それぞれ・・・ま、君には理想の妹に見えるみたいだけだね。」

ため息をついて賢治は妹に質問してみた。

「晴海、君が想像していた『クリムゾン』とは的外れだろうか？」

また出てきた単語に驟雨は頭を悩ませながら考え込んでみた。晴海と呼ばれた賢治の妹は何かにすぎるように兄を見上げた。

「まだ、驟雨さんが『クリムゾン』の可能性は低いです！！それに、驟雨さんがそんな物騒な連中の仲間だなんて……。」

どうやら自分の事を話しているようだが、完璧においていかれている驟雨は先程から頭の中に疑問符がうじゃうじゃうじゃとごめいているのであった。そろそろ駆除せねばいかん。

「……晴海、驟雨は君が関係している連中とは全くもって関係ないよ。それに命を救ってもらった恩人にお礼も言わないでこんな話をするのは良くないと僕は思うが？」

「……そうですね、お兄様の言うとおりです。私はちょっと疲れしているでしょう……。驟雨さん、危ないところを救っていただいてありがとうございます。」

「あ、いや……。そんな別に……。」

驟雨は実際は特に何もしていない。ストレスを発散させたただけで、更に言うなら怪我をさせたのは驟雨である。まあ、ここは黙っておいたほうがいいだろうと驟雨は黙っておいた。少々戸惑いながらも罪悪感を覚え、とりあえず急いで新しい住処となったアパートに帰ることを告げたのだが……

「その・・・あの・・・まことに申し訳ないのですが、貴方が本当に『クリムゾン』なのか調べたいんです。ご協力お願いできますか？」

「はぁ・・・少しぐらいなら大丈夫だけど・・・。」

そういつて驟雨は周りの雰囲気流されるようにして、調査に協力することとなったのであった。まあ、驟雨は『クリムゾン』とは何かを知らないのでもうここまで協力できるかは謎なのだが・・・。

「晴海、そういうことは後にしなさい。驟雨、今日のところは帰っていいよ。」

「!・・・お兄様それはちょっと・・・。」

「驟雨も疲れてると思うからね。」

「驟雨さんが疲れているのなら・・・そうですね。わかりました。」

まあ、驟雨も疲れていないか?と聞かれたら首を振るだろう。今日はさまざまなことがあり、特に今後の彼の人生で忘れられない出来事はある、鍋であった。べたなねたではあるが、聞くのと体験するのは話が違ふのだ。

「晴海、僕もそろそろ帰るから、今日一日は静かに入院してなよ?」

「・・・わかりました。」

春海を残して二人は病室の外に出てそのまま家のほうへと向かい

始める。

「・・・賢治、晴海ちゃんは料理得意なほう？」

「まあね。うまいといえbaumまいかな？僕としては料理下手くそなほうが良かったけどね。そっちのほうがぐつとくるね。」

はたと笑いながら二人はそれ以後もいろいろと話し合っていた。メイドはどうだとか、チアリーダーとか・・・まあ、そんな話だ。

「料理は絶対にうまいほうがいいね。下手なのは遠慮したい。」

「そうかなあ？僕としては料理が下手なほうが可愛いと思うからさあ・・・やっぱ、ぐつと来るね。」

この二人は似ているが、絶対に交わることは無いだろう。闇と光は両立すべきもので、相反するものでもある。片方が無ければもう一方は存在しないし、片方を消し飛ばせばもう片方も存在することが出来なくなるものだ。

「驟雨、『クリムゾン』が何者か知りたいかい？」

驟雨はその『クリムゾン』が何なのかをさっぱり知らなかったのを知りたくなった。知るということは基本的な学習方法だ。

「ああ、教えてくれないかな？一体、『クリムゾン』って何なの？もしかして危ない組織の事とか？」

場所が悪いといって賢治は驟雨を連れて近くの公園に向かって歩き出した。『クリムゾン』とは何か・・・

次回、『クリムゾン』とは何かについて書きたいと思う。

六、

鉄柱が凹んだブランコの片方に賢治は腰を下ろした。その隣のブランコに立つ。

「驟雨、『クリムゾン』って何だと思う？」

「紅いって意味？」

確かに、クリムゾンとは深紅という意味がある。

「まあ、確かにそういう意味はある。だが、今のところは『クリムゾン』は下からあった赤ではないんだ。つまり、この世界に存在してはいけない、色素・・・まあ、簡単に考えるなら悪魔と天使の混ざった奴って考えればいいよ。」

「そんなに簡単に考えればいいの？」

「ああ、大丈夫だ。」

『クリムゾン』を理解するにはちょっと早すぎる。何故かって？まだ物語が全然進んでいないからといっていいだろう。

「驟雨、これから忙しくなると思うよ？」

「そうかな？」

「ま、今日は帰ったほうがいいさ。じゃあね、驟雨。」

賢治はそういつて何かのアニメの曲を口ずさみながら漆黒の闇にその姿をゆだねるようにして消えた。

僕も帰るかといった感じで驟雨もアパートに帰ることになった。

「ただいま……。」

既に電気は誰かに消されており、もう一人の同居人は寝ているようだ。

しかし、借りた部屋には合計で四つの部屋があり、どこで寝ているかまではわからない。しかもベッドは一つしかなく、驟雨と里奈が一緒に寝ることになる可能性も無いわけではないので驟雨はどきどきしながらそんなことを考えたのだが、思えばあのベッドは一人で寝ていても床に落ちるくらいに小さかったので二人で寝るのには不可能だったことを思い出した。

「……どうやら僕は床で寝ないといけないみたいだ。」

集配引きが聞こえてきている反対側の部屋に入り、何も無いところに布団を引っ張って持ってきてその日に終わりを告げたのであった。その日、驟雨の夢には鍋がうじゃうじゃ襲い掛かってきて、鍋を片っ端から『クリムゾン』の力で葬り去ったそうである。

次の日、驟雨は里奈よりも早く起きることに成功した。何故なら、朝からあんな刺激的料理は体に毒だからである。さっさと起きてパンを焼かずにそのまま食べる。何処か微妙に他人とずれているところが驟雨にはあり、パンをたまに焼かないで食べたりもするのだ。

驟雨が二枚目に手を出したところで里奈が起きてきた。目をこすりながら

「驟雨、おはよう。」

「ああ、おはよう。」

驟雨は里奈に別段目を向けることなく、昨日の事が全くの夢ではなかったことを悟った。

「驟雨、似合ってるかな？」

驟雨は休日が終わったので今日から高校だ。だから急いで二枚目のパンを食べ終わると里奈がそういつてきたので知らん振りもできずに初めて、里奈のほうに視線を動かした。

そこには、驟雨が通っている高校の制服を着ている里奈の姿があった。

驟雨は冗談きついよと思いながら里奈に尋ねる。あまり時間が無いので早口なのだ。

「里奈、なんで君が制服なんて着ているのかな？」

「だって、私は高校二年生だよ？別に持ってもおかしくないでしょ？」

驟雨は初耳だったのでちよいとばかり驚いた。

まあ、これまで驟雨は友達は少ないほうで、女子となるとめったに話をしない。

したとしても相槌を打つ程度であったのだ。

興味が無いわけではないが、自分の顔が別にかっこいいわけでもなく、スポーツに秀でているわけでもなく、頭がいいわけでもないのだ。自分の事は自分が良く知っていると思っている驟雨は秀才の兄

弟たちとは違ってかなり平凡かつ、平和な日常を送っていたのだ。だから、驟雨が他のクラスの女子をほとんど知らないのかもしれないかもしれない。

「ま、まあ・・・似合ってるんじゃない？はは、それじゃあ僕は学校行くからね。」

驟雨は里奈よりも先に学校に行くことにした。

里奈には高校の制服がばれていないと思われるので、同じ高校に必ずしも通っているとは思われないだろう。驟雨は里奈に制服姿がばれないようにさっさと着替えていってきますといわないままに慌てて自分と里奈が通っている高校へと向かって走り出した。驟雨はまあ、里奈と自分の間にそういう噂が立たないように極力努力をしたのだ。将来の事も考えていたからである。がんばれ、青少年！！驟雨が二年三組の教室につくと、大体の生徒は既に席に座っていた。まあ、驟雨が教室に着くのも大体平凡なのだ。驟雨はこの教室が唯一の平和なところだと思っていたが、そうはならなかった。

「失礼します！」

教室の後ろのほう（驟雨は教室の前のほうで、隣の席は賢治だ。）の扉が景気よく音を立てて開き、どっかのクラスの少女が入って来た様だ。

教室中は少し静かになったが、驟雨は机に全体重を預けて今日の英語の小テストの予習をしていた。

そして、驟雨の隣にその少女が立ったようだ。

驟雨は視界の隅っこに入ったスカートを眺めた。眺めるだけだ。別に顔を見ようとは思わない。そりゃ、名前を呼ばれたりすれば顔を上げて相手の顔を見るだろうが、学校での女子の知り合いが先生ぐらいな驟雨は顔を上げることなく、再び英語の小テストに向かってい

た。他の生徒も何人かは英語の小テストの予習を頑張っている。

「驟雨さん。」

「Vital、不可欠な。」

「驟雨さん、坂風 驟雨さん!!」

驟雨はどうやら自分が呼ばれているようだと思って呼んだ本人の顔を見た。驟雨は物覚えがいいほうではないので一度聞いた声でもあまり長い間聞いていなかったら直に忘れてしまう。だから、声を聞いても誰が来たのか分からなかったのであった。

「あ、賢治の妹さんじゃないか？」

「昨日はお世話になりました。」

顔を見てようやく賢治の妹だと気がついた驟雨は首を思いつきり傾けてその妹に尋ねた。

「賢治はまだ来てないようだけど？」

「お兄様はもうそろそろくるでしょう。」

「あ、そうなんだ。」

それだけの会話を終えて、驟雨は再び、英語の小テストの予習に向かった。しかし、そんな驟雨を賢治の妹、晴海は再び驟雨に話しかけてきた。

「今日の放課後、ちょっと用事がありますので……図書館に来てくれませんか？私、ちょうど図書委員ですので……。」

驟雨は当然、賢治がらみだと思ったので、深く考えずに頷いた。

「ああ、いいよ。放課後だね？」

「はい。よろしくお願いします。」

それだけ言ってようやく晴海は教室から出て行った。驟雨は何かを聞いたそうな周囲の視線に出来るだけ気がつかないフリをして英語の小テストの予習に向かった。

そして、四時間目の英語の時間が終わり……驟雨は小テストで合格点を取ることができなかったのであった。昼休みは隣の賢治と一緒に弁当を食べるのが日課となっていたので、今日も一緒に食べることになったのだが……。

「たまには、屋上で食べよう。」

と賢治が言ったので驟雨はお弁当を持って日当たりの良い屋上へと向かったのであった。屋上に続いている会談へ行くとちゅう、驟雨は何処か出た見たような顔の女子高生を見かけた。

「……げ。」

驟雨はそれだけ言うと言賢治に隠れるようにして向こうから友達と歩いてきている里奈をやり過ごした。

「？驟雨、何かくれてるんだい？」

まさか、一緒に住んでいる悪魔が廊下を歩いてきたからばれないように隠れてましたなんて言えない。

「いや、ちよつとき・・・ま、なんでもないよ。」

驟雨は賢治にそう伝えて逃げるようにして走り去ったのであった。そして、里奈のほうはというと・・・

「ほら、さつき・・・廊下ですれ違ったのが今噂になってる三組の霜崎くんだよ！頭もいいし、スポーツも出来るんだって！！」

「へえ、まるで絵に描いたような秀才だねえ。ところで、その隣にもう一人男子いなかった？」

「？見てないからわかんない。」

里奈の友達がこういう人でよかったと驟雨は思うべきであろう。まあ、そんな驟雨であつたが、とりあえず・・・屋上まではことを進むことが出来た。

「・・・賢治、ここはちよつと食べづらいと思うけど？」

辺りには彼氏彼女の空間が広がっている。男二人で来るべき空間ではなさそうだ。

「なあに、ちよつとだけなら邪魔にならないだろう。なんなら、あゝん、ぐらいならしてやろうか？」

「・・・遠慮しておくよ。」

とりあえず賢治と一緒に近くのベンチに座って驟雨は弁当を開けた。持ってきているのはトーストパンだけである。弁当の中身はそれだけ……。

驟雨はそれを泣きながら食べたのであった。近くでは彼女が腕によりを掛けて作った弁当を彼氏が食べている。驟雨はそんな男子生徒達を恨みながら弁当を食べ終えたのであった。

「驟雨、もう食べたの？」

「賢治、僕にはこの空間は地獄だ！用事があるから行ってくるよ！」

そういつて驟雨はその場を後にしたのであった。

七、

さて、短いお弁当タイムも終了し、驟雨はむかむかしながら……校舎をうろついていた。彼女がいる奴はいいよなとかいって歩いている。

「あ……もう五時間目が始まるか……」

もうそろそろでお昼休みも終わりだったので驟雨はもはやした気持ち誰かにぶつけないかと思いついた。彼女が教室へと向かうことにした。辺りの人が見たら確実に言うだろう……。

「坂風君の背中から……嫉妬のオーラを感じました！！」

と……。

そんな嫉妬のオーラを背中に宿した驟雨であったが、再び廊下の向こう側から歩いてきている里奈を発見してあわてて近くの男子トイレに逃げ込んだ。

男子トイレ、そこは未来永劫、男子の聖地である。誰にも邪魔されずに引きこもっていたいと思うとき、驟雨は一人で個室に入り込むのであった。まあ、今日はそんなことをせずに外を里奈が行ってしまえばいいのだが……。

「……ふう、びっくりしたなあ。」

「何がびっくりしたんですか、驟雨さん？」

トイレから出てきた驟雨は同じく、女子トイレから出てきた賢治の妹に話しかけられた。驟雨は内心どきりとしながらもその質問にあせって答える。

「……い、いやさあ……。ほら、身内って言うか、そんな類の人と学校で会うとなんか嫌じゃない？ そんな感じ……。あははは。」

「はあ、成程……。確かに私も友達なんかと一緒にいるときはお兄様に会いたくありませんけど。」

「そうだよね！ うんうん……。じゃ、そろそろ授業だから僕はもう行くね？」

これ以上何かを突っ込まれる前に驟雨はその場から思いっきり逃げ出そうとしたが、

「驟雨さん！」

と、呼ばれてしまったので立ち止まってしまった。何を突っ込まれるのだろうかと思いいながら驟雨はどきどきしていたが……。

「約束、忘れないでくださいね？」

「え、放課後の事なら大丈夫だよ。うん、忘れてないからさ・・・じゃあね!!」

驟雨は内心ほっとしながらその場を立ち去ったのであった。その後、放課後まで驟雨は知り合いの女子と誰とも会うことなく、男と男の暑苦しい友情の仲で授業を終えたのであった。

放課後、驟雨は図書館へと向かうことにした。無論、約束を守るためである。

「さて、一体全体・・・何の約束かな？」

賢治の妹とは過去に一度だけ会ったことのある驟雨だが、そのときはちらりとしかあっていないのでほとんど覚えていないのだが・・・。

とりあえず驟雨は賢治の妹ということを踏まえてどのようなことが起きるか想像してみた。まず、第一である・・・これは過去に驟雨が賢治に呼び出されたことなのだが・・・

「驟雨、お金を貸してくれ!!」

何でと尋ねたところ・・・。

「僕には今、お金が非常に必要なんだ!! いや、家に帰ればお金あるけど、今もって無いんだよお!! 直返すから、お願いだあ!!」

驟雨にそこまで言って借りた賢治は、残り一個となっていたアニメの人形を購入・・・お金は結局返してもらっていない。

「はあ、あんどきは親に色々言われたもんだなあ。結構怒られたし・
・・・。」

どうやらあまりいいことではなさそうだと思いながらも驟雨は晴
海がいる図書館までやってきた。

「約束は約束だからなあ。守らないといけないよなあ。」

驟雨はそんなことを呟きながら図書館へと入ったのであった。い
つもは人の出入りが多い図書館であったが・・・なにやら今日は
人のはいりが悪かった。

晴海はいないかと探しながら驟雨は探していると管理人席のどこ
ろに座っている晴海を見つけた。どうやらあちらのほうも気がつい
たようだ。

「驟雨さん、ちょっとこちらに来てください。」

「え・・う、うん・・。」

驟雨は言われたとおりに管理人席のところまでいって近くの席に
座った。そして、それを確認してから晴海は口を開いた。

「・・・まずは、公園でのことを改めて御礼を言いたいと思います。
ありがとうございました。」

改まってそういわれたので驟雨は首を振った。

「いや、そんな・・・たまたまだからそんなに頭下げなくていいよ。
」

驟雨にそういわれて晴海は頭を上げた。

「・・・驟雨さんって変わってますね？お兄様の幼馴染で大親友って所がありますね。」

ほめてるんだか馬鹿にしているんだか分からなかったので驟雨はそれを黙って聞き流した。そして、晴海はため息をつきながら驟雨に話しかけた。

「何故、あの時私を助けたんですか？そのときはまだ、私がお兄様の妹だって知らなかったのでしょうか？現に私は驟雨さんに小さい頃から会ってませんし、お兄様に聞いても同じようなものでした。自分の利益に成るわけでもなしに・・・何か目論んでいるんですか？」

勿論、本音のところは全く違ってたまたま驟雨が公園を覗き込んでいただけってことなのだけれども、折角勘違いしてくれているのだから黙っておこうと驟雨は決めた。それに、少女を助けたのも事実なので驟雨はその質問に自分なりの答えを言うことにした。

「・・・僕はね、人を助けるのにも利益って物は存在するって思うんだ。まあ、それは物じゃなくて、感情だろうけど・・・。」

「感情？助けた人が助けてくれた人に好意を抱くってことですか？」

「・・・いや、それなら男同士が助け合ったら大変なことになると思うけど・・・ちょっとちがうな・・・僕の場合はとりあえず、誰でもいいから心からの何かって物を見せてもらったときに嬉しいって思うね。」

その答えに晴海は首を傾けた。どうやら驟雨の言っていることを

理解していないようである。驟雨はもつと簡単に説明できるように努力してみた。

「例えば、誰かを助けるのにも色々理由があるだろう？その人を助けて助けることが出来れば助けた人が『ありがとう』と心の底から言ってくれる・・・それはいくらお金をつぎ込んでもことと場合によっては得ることは出来ない。ましてやそれはお金を掛けて手で手に入れるものではないんだ。」

簡単に理解してもらおうとした結果、余計話がややこしくなってきた感じがある。

「とりあえず、簡単に言うなら・・・僕が晴海ちゃんを助けたのは君がこの世から居なくなってもらいたくなかったから。まあ、知らない人がなくなっても確かに自分に影響なんて無いかもしれないけど・・・自分の知らないその人の世界の人たちは悲しむ・・・まあ、僕はそういうものを見たら悲しくなるからね。悲しくなるのは嫌だから、僕は僕のために君を助けたと思っていいよ。」

「はぁ・・・わかりました。」

なんだか分かっていないのか分かったのかそんな微妙な顔をしながら晴海は頷いた。驟雨はそれで話は思ったとばかりに椅子から立ち上がろうとするが・・・

「あもう、話がまだ終わってないんですが？」

「あ、ごめんごめん!!」

そういつて再び晴海の目に視線を飛ばす。別にがんついているわ

けではない。驟雨は幼い頃から人の話を聞くときは相手の目を見て聞けと主に兄貴たちに半ば無理やりに教えられたのであった。まあ、本人は嫌な記憶だったので忘れているが……。

驟雨に真剣な表情の視線を飛ばされて言いづらそうに晴海は答えた。

「・・あのう、悪いんですが・・驟雨さんの家に下宿させてもらえませんか？」

「へ？それってどういうこと？」

「いや・・昨日、驟雨さんのご自宅に連絡したところ、驟雨さんは既に自宅じゃなくてアパートに住んでいるって驟雨さんのお母さんに言われたんです。まあ、それで・・私の今の住んでいる場所が色々会ってですね、住めなくなっただんです。」

これは余談だが、お兄様と晴海は賢治の事を呼んでいるが、実のところはかなり兄の事が嫌いで、今では同じ家に居ると思うだけで神経が滅入るそうだ。

晴海は自分の母にそんなことは言えずにとりあえず、自分ももう、高校生なので一人で暮らしたいといったのだが当然のようにそれは却下された。だが、賢治が驟雨の家ならどうだと母親に言って母親は承諾した。まあ、この母親はかなり人を疑うところがあるが、一度信用したらとことん信用するような極端な人だった。そして、そんな彼女に驟雨の家族は絶大な信用をされているらしく、考えるまでも無くOKされたそうだ。

「ふうん、そうなんだ・・。賢治も色々あるんだなあ。」

「駄目でしょうか？」

驟雨は今のアパートが狭いことと、もう一人同居人が居ることを告げた。そしてそれが女の子であることも……。

「もしかして、彼女ですか？」

「いや、単なる……なんだろう？ まあ、知り合ってところかな？
それでいいならいいんじゃない？」

「それなら、今日からお邪魔させてもらいますね？」

こうして、驟雨の住むアパートにもう一人の同居人が決定したのであった。驟雨は一応、あの管理人に話そうかと思ったのだが、まあ、あの人なら別に構わないだろうと思って言うのをやめた。そして、そろそろ帰って着替えておかないと里奈に自分と同じ学校に通っていることがばれてしまう。

「な、ならさあ……そろそろ帰らないかな？ ほら、同居しているもう一人にも挨拶しておかないといけないし……。」

驟雨の提案に晴海は素直に頷いた。その顔には疑いというものは見当たらない。

「そうですね、そうします。驟雨さん、案内してくれませんか？ お願いますね。」

こうして、物語はようやくスタート地点に着いたようなものである。さて、これからどんな展開になるであろうか？

八、

この世に、悪魔と天使が居る……お互いにそのことを知った

のはついぞや最近の事であった。

そしてお互い、先入観から敵対視するようになったのであった。だが、そんな黒と白の戦いにありえない色が混じっていたのだ。

それは、赤ではない、紅・・・その色は事実、この世界には存在しないような力量だったために、白と黒の戦いに半ば巻き込まれるようにして参戦してしまったのであった。まあ、簡単に言えばプロレスの試合を観戦していた観客が無理やりマットに放り込まれたようなものだ。ま、実のところは色というものはまだまだあるのだが・・・。

とりあえず、そんな『クリムゾン』だと思われる少年、驟雨は高校二年生だ。そして、容易な気持ちで悪魔の少女を助けてしまい・・・なかば流されるような感じで同居人となってしまう。更に、幸か不幸か、親友の霜崎 賢治の妹とも同居することになってしまうのである。

「驟雨さん、ここですか？」

「う、うん・・・そうだけど？」

まるで化け物が出そうな雰囲気のアパートであった。

「・・・やめとく？」

「いえ、ここまできたんだからやめません。」

驟雨の質問に晴海はそう答えて驟雨よりも先に歩き出した。驟雨はため息をついてその後ろを追いかけて、自分たちが住んでいる部屋のところまで案内する。

「さ、ここだよ。（僕が帰宅部でよかったよ。まあ、里奈はまだ帰

ってきてないと思うけど・・・急いで着替えたほうがよさそうだな。」

驟雨は部屋の鍵を開け、晴海をリビングに案内する。幸い、部屋はまだあと二つ残っているので晴海の分を入れても一つ残る。

「もう一人の人はまだ帰ってきてないみたいですね？」

「う、うん・・・適当にくつろいでよ。僕は着替えてくるからさ。」

そのもう一人が帰ってくる前に驟雨はさっさと自室にこもって服を着替え終えたのであった・・・。そして、居間で寛いでいる晴海の近くに座る。すると、タイミングを見計らったかのように里奈が帰宅してきたのであった。

「あ、晴美ちゃん、この人がこの部屋に住んでいる同居人の・・・里奈なんだ。」

その里奈を見上げて晴海は固まっていた。里奈も晴海を細めで眺めて困ったような溜息をつく。

「・・・驟雨、なんで天使なんか連れてきてるの？彼女？」

「え・・・違うよ、晴美ちゃんはここに下宿することになったんだよ。」

「ふうん、そうなんだ・・・ま、寝首を取られないように注意すればいいか・・・よろしく、晴海天使？」

微妙に皮肉の混じったような感じの言葉に晴海は気を取り直したのか、驟雨に尋ねる。

「驟雨さん、この悪魔とはどのような関係なんでしょうか？・・・普通、悪魔と『クリムゾン』が手を組むなんてありえないのですが・・・。」

その質問には右腕を突き出して里奈のほうが答えたのであった。少々、照れている感じもする。

「・・・いや、手を組むとかそんなのじゃないのよ。私が天使に囲まれて絶体絶命って時に、驟雨が助けてくれたのよ。まあ、これじゃ・・・種族なんて関係ないの。私は驟雨が助けてくれたから私は驟雨のために一緒に居るだけ・・・。」

顔を赤くしてそう答える里奈に驟雨は首を幾分傾げながら（どちらかというと里奈が驟雨に何かをしてくれたことは今のところない。）里奈を見ていた。晴海はそんな里奈に対抗するかのように答えた。

「私だって驟雨さんには助けられました。まあ、悪魔である貴女がいるのは少々不機嫌ですが、驟雨さんが邪魔だと思っていないのなら致し方ありませんね。里奈さん、これからはよろしくお願いしますよ？」

「ええ、望むところよ。」

お互い、目から火花を出しながら・・・友好的な握手を交わしたのであった。まあ、驟雨はそんな二人に冷や汗をたらしながらも・・・暴力沙汰にならなかったことにほっとしたのであった。そして、驟雨は早速晴海を部屋に案内する。

「さ、ここが晴海ちゃんの部屋だよ。僕たちの部屋とあまり大差は無いから、何かあったら直に言ってね。」

「ありがとうございます。」

ちょうど、引越し屋もついたようで、晴海は少ない自分の持ち物を自分で部屋に運んでいた。その様子を見ながら里奈は驟雨に尋ねた。

「驟雨、まさか天使側に転がったんじゃないよね？」

「は？何言ってるの・・・？事情も知らない僕がそんなことできるわけ無いでしょ。」

「・・・それならいいよ。」

やれやれといった感じで里奈は呟き、驟雨は首を傾けたのであった。まあ、首を傾けていたのは少しの間だけで、次に考えたことは料理の事であった。毎日で前なんかをとっていたら驟雨のお財布は夏に使うカイロのようになってしまう。

「晴美ちゃん、悪いけど料理できるかな？」

驟雨は部屋から出てきた晴海に尋ねた。晴海は里奈と驟雨を交互に見て、

「あの・・・二人とも出来ないんですか？」

「う、うん・・・。」

「料理ぐらいなら出来ますよ。任せてください。」

その言葉に驟雨は内心、ほっとし・・・里奈はむっと来た。それは驟雨が安堵のような表情を見せたからである。

「驟雨、でれでれしないでよ。」

「してないよ。はあ、まあ・・・料理は晴海ちゃんに任せるとしてどうにかして収入源を見つけないと・・・。」

料理人は見つかったのだが、驟雨が持っているお金はそろそろ底をつきそうである。驟雨は帰宅部の割にはバイトなんてしていないのだ。と、そこで里奈が口を開いた。

「私がバイトしてるし・・・ま、さすがにそれでも足りないでしょうね。驟雨、私が割りのいい仕事場を紹介してあげるわ。」

驟雨はその言葉に不安を覚えたが、他人のありがた迷惑的なことでも笑顔で受け取るような少年だったので、そこは不安を飲み込んだ。

「ありがとう、ところで・・・その仕事は何かな？できれば、体力関係の仕事はしたくないんだけど・・・。」

なんて贅沢な野郎だと思わないでもないが、驟雨がここで言っているのは天使と戦えと里奈が言いそうな雰囲気だったからである。空気を読まない男、それが驟雨である。だが、予想に反して里奈は首を振った。

「いや、家庭教師だよ。知り合いの中学生だったかな・・・？その人に勉強を教えてあげればいいの。私はちょっと違うことをやってるけどね？どう、やってみない？」

驟雨は自分の学力と相談しながらその仕事を一応、受けてみることにした。

「受けてみるよ。まあ、駄目だったときは別のバイトを探さないと・・・。」

「驟雨さん、そろそろ夕食の準備を始めてもよろしいですか？」

「うん、お願いするよ。じゃあ里奈、僕たちは邪魔にならないように食器を並べながら晴海ちゃんにエールを送ろう。」

こうして、驟雨と里奈は食事時は料理人にエールを送る係りとなった。他にも色々仕事分担が決まったので書いておく。風呂、トイレ掃除は驟雨担当。部屋の掃除は里奈担当。料理関係の仕事は晴海担当である。

「・・・うん、普通に料理うまいね？」

「ありがとうございます。」

「く、確かにおいしい・・・。」

二人に褒められたのでこれまであまり褒められたことのない晴海は嬉しそうであった。因みに今日の夕食はロールキャベツであった。何故か、里奈の部屋から圧力鍋など出てきたのでそれを使用するにいったのだ。

そして時間は過ぎ、そろそろ良い子も悪い子も寝る時間となってきた。晴海はかなりそわそわしている。

「じゃあ、二人ともお休み。」

「うん、お休み、驟雨、晴海……。」

「お、おやすみなさい……。」

それぞれがおのおのの部屋に帰っていき、驟雨は制服をハンガーに掛けて部屋に吊るす。そしてベッドに入って目を瞑ったのであった。

どのくらいの時が経ったのだろうか？うつらうつらしていた驟雨を誰かが起こした。

「……？」

「あ、あのう……。」

起こしたのは晴海であった。何故か、自分の枕を持ってきている。寝ぼけた驟雨はそんな晴海に尋ねた。

「……おしっこについてきて欲しいの？」

「いえ、そうじゃありません。」

ああ、そりゃそうだ……高校一年生になってもトイレが怖くて勤まるかと思いつながら驟雨は再び寝ようとしたのだが、晴海に止められた。その顔はトイレに生きたような感じを受けてしょうがない。もしくは、何か重大なことが起きたのかもしれないと驟雨は頭の中

の全細胞をコンディションレッドに移行。ブリッジ遮蔽でいつでも戦闘開始できるような状態へと変わった。

「何、何が起きたの？」

「いや、そうじゃなくてですね・・・その・・・あの・・・」

普段は物事をはっきり言う晴海であったが、今回はなにやらおかしい。そんなことを思った驟雨はもしかしたら偽者ではないかと思いつきながら晴海を見ていた。そんな目で見られているとは全く思っていない晴海は両方の人差し指をぎよぎよいしながら顔を真っ赤に染めていたのであった。その様子に驟雨は一つの疑問を覚えたのであった。

九、

そわそわしている親友の妹を驟雨は眺めてため息をついた。晴海がこの部屋にやって来て既に十分近くが経っていた。驟雨は再び眠気に襲われてきていたのでそろそろ寝ようかと思っていたのだが・・・。

「あのー、出来ればこの部屋で寝てもいいですか？ なんだか、あの部屋で独りで寝るの怖くて・・・。」

勿論、驟雨は半分頭の中が眠っていたので適当に返事をしたのであった。

「うーん、勝手にしていいよ。」

「本当ですか！ ありがとうございます。」

晴海は自宅では母親と未だに寝ているのであった。独りで寝るの

が怖く、幼少の頃に独りで寝ているとちょっとした事件に巻き込まれたことも関係している。天使という種族なので知らないが、暗いところが怖いのである。

「じゃ、おやすみ・・・。」

驟雨は自分がある意味凄いことを決断したのに気がつかずに、そのまま眠ってしまった。晴海もその驟雨の隣にそそくさと入って目をつぶる。その日、驟雨は何故だか知らないが、悪夢に襲われたのであった。

「・・・ん？」

朝となって目を覚ました驟雨は誰かが隣に居ることに気づいてその相手を確認した。隣には当然のように晴海が静かに寝息をたてて幸せそうに眠っている。

驟雨はその光景を見て一発で眠気が吹っ飛び、あせり始めた。

「・・・。（え、これってどういうことなんだ？昨日の夜、たしか・・・晴海ちゃんが夜中来たのは覚えているんだけど・・・？あれ・・・そこから先を覚えてないぞ！！）」

驟雨は冷や汗をだらだら流しながら一人であせっていた。晴海をちらちらと盗み見たりしているとその問題となっている晴海が目覚めました。驟雨はドキッとなってそのままベッドから転げ落ちる。

「驟雨さん、おはようございます？どうかしたんですか？」

「い、いや・・・なんでもないよ。うん、は、晴美ちゃん・・・そろそろ朝食を作ってくれないかな？ほ、ほら・・・今日も学校だから

らさ?」

挙動不審な驟雨を見て晴海は寝ぼけた頭でどうかしたのかと考えながらも頷いた。そして、枕をそのまま置いて部屋を出て行った。一人残った驟雨は何が怒ったのかを極力考えないようにして自分も何か手伝えることが無いか探しに部屋を出たのであった。

出来上がった朝食を二人で食べていると、里奈が制服に着替えて起きてきた。驟雨は何故だかり奈と目をそらして朝食を食べ始めた。

「驟雨、おはよう・・・?」

「お、おはよう・・・。」

「?声が裏返ってるよ?どうかしたの?」

「いや、なんでもないよ。」

「?」

里奈は不思議に思いながらも自分の定位置について朝食をがつがつ食べ始めた。そして、そろそろ驟雨がいつもの登校時間となったときには既に晴海は着替え終わっており、既に学校に行っていた。何でも、先生に引越したことを告げに行かなくてはならないらしい。驟雨と里奈が沈黙を保っていると、里奈が突然口を開いた。

「驟雨、驟雨ってどこの高校通ってるの?」

「・・・え?そ、そこいらの高校に通ってるよ。」

「そこいらってどこ?」

「あ、そろそろ学校に行かないと遅れちゃうから、じゃあね。」

驟雨は自分が里奈と同じ高校に通っているとは言えず（驟雨曰く、里奈に同じ高校に通っていることがばれたら毎日のように話に来ることが目に見えていると思っっているから、そういうのを噂にされるのが嫌いな驟雨はできるだけ里奈に知られたくないそうだ。）まだ半分近く残っていた茶碗の中身を一発で飲み込み、死に物狂いで自分の部屋に戻ったのであった。残された里奈は当然のように怪しがる。

「どうかしたのかな？もしかして、私に何か隠し事しているのかも……。」

全く持ってその通りである。男は黙って何かをしたがるものだ。

「あ、成程……あの本をこっちにやってきてから部屋に隠したに違いない！！」

まあ、そういうことを考えるのも自由だが、驟雨は既に部屋の窓から登校を開始していたのであった……。窓から出てくるときに近所のおばさんに目撃されたのがちよつと痛かったであろう……。教室の自分の席に着いた驟雨はなんだかこの数日のうちに疲れていた。

「はあ、まさかこの世界に悪魔と天使が居るなんて……。それに、僕も人間じゃないらしいし……。」

一人でぶつぶつ言っていると、隣の賢治が登校して来た。その顔は何かをい痛そうにしている。

「驟雨、昨日は晴海と寝たんだろう？」

その言葉に驟雨は見事に固まった。石化した驟雨をシャーペンでつつきながら賢治は更に言葉を続ける。驟雨はなんとか席か状態を解いて賢治の言葉を聞く。

「まあ、晴海のことだから自分から言っただろうね？なあに、親友の君にならしようがないと思っっているよ。・・・驟雨、冗談だからその右腕にもっている国語辞典をおろしてくれ。」

「・・・賢治、冗談というものは時と場所を考えるものだと思うぞ。」

その日の授業は特に移動教室なんて無かったので驟雨は極力、教室から出ないようにしていた。教室から出なければ晴海にも里奈にも会わなくていいからである。驟雨は噂されるのが嫌いな性格なので黙って教室で読書を楽しんでた。だが、事件というものは良く起きるもので、それが、放課後に起こったのが幸いといったところであっただろう・・・。

その日、家に帰るために下足場へと向かっていた驟雨を誰かが後ろのほうから呼んだ。

「その君、間違ったら悪いけど・・・坂風 驟雨かな？」

その声に聞き覚えのあった驟雨は慌てて廊下の右に曲がってこっちをやってきていた手頃な男子生徒を変わり身にして女子トイレに逃げ込んだのであった。そして、近くの個室に身を隠す。こんなところを誰かに見られたら大変なことになっていただろう・・・。

廊下からは里奈が間違った相手に謝っている声が聞こえている。

そして、その里奈がそのトイレに入ってきたのであった。驟雨が入っている個室の前を通り過ぎる。

「・・・あれ？どこも入ってるなあ。あ、ここだけ開いてる。」

驟雨はあわてて個室に入ったので鍵を閉め忘れていたのであった。慌てて鍵を閉める。

「・・・あ、誰が入っているんですか？」

驟雨は冷や汗をびっしり掻きながら考えた。そして、中から、ノックをする。

「あ、入ってるんですね？あもう、直済みますか？」

この返事をどうしようかと驟雨は思い、裏声を出すことにした。

「ちょっと、かかりそうですわ！！全部入っているのなら職員用のトイレに行ったほうが早いかもしれません。」

恥ずかしい思いをしながら驟雨はそういった。

「そうですね、分かりました。」

その返事に里奈は納得し、どうやらトイレを出て行ったようである。驟雨は一気に脱力し、一人でため息をついた。どうやらさっさとこのトイレを脱出したほうがよさそうである。だが、里奈のおかげで他のトイレの個室にも誰かが入っていることが判明した。もしも、同じタイミングで行ったら創造したくもない大変なことになるだろう・・・。

「……。（ここはタイミングが大事だ。もしもしくじったら……）」

そして、驟雨は扉を少しだけ開けて誰か居ないか確認する。誰も居ないので出ようとする……隣の個室の扉が開く。

「はあ、女子が入ってきたからびっくりした……。」

隣から何処かで聞いたような感じの声が聞こえてくる。何故だか知らないが、賢治が女子トイレに入っていたのであった。

「全く、男子トイレの個室が全部埋まっているなんて誰が想像できるものか……女子トイレに僕が入ってきたときに誰も居なかったから良かったものを……。」

そんなことを一人でぶつぶつ呟きながら出て行った。ちょっとおかしいと思いながら驟雨も急いで個室を飛び出す。そして……。

「きゃー！！！」

「うわああ！！！」

もう一つの個室から先程の賢治の声を聞いた女子があわてて個室から出てきたのであった。驟雨の姿を確認して叫び声を上げる。当然のように驟雨は廊下に飛び出し、急いで学校から出て行ったのであった……。

顔を見られてなかったから良かったものの、驟雨はブルーな気持ちで町をうろついていた。家に帰る気力がなくなったのである。

「はあ、正体がばれたらちよつとやばいな・・・どうしたもんだらう？」

何もしていないのに変態呼ばわりされるのは驟雨のプライドに大きな傷をつけるであろう・・・そのプライドがどれほどのものかは知らないが。

夕飯までは結構時間があつたので驟雨は町をうろつくことにした。このなんともいえないもやもやとした気持ちを発散させるために何かをしようとしたのである。

「あとう、すいません・・・。」

驟雨が街中を歩いていたら斜め右後ろのほうから声を掛けられた。驟雨は不審に思いながらも声を掛けてきた相手を見やる。

「・・・何か御用でしょうか？」

驟雨が目を向けた先に立っていたのはこの近くにある中学校の制服を着た一人の少女であつた。

「すいません、今日転校してきたんでちよつと道に迷ったんです。すみませんが、ちよつと道を教えてもらいたいですけど？お願いしますか？」

十、

驟雨はなんだか知らないけどついてるなあと思っていた。

それは何故か？簡単なことである。一見普通の高校一年生なので、女の子と話す機会はほとんど持っていないのだ。だから、女の子に声を掛けられただけで有頂天になったりするものだ。今まさに、驟雨は人生の幸せというものを悟ったに違いない。安っぽいなどとい

ってはいけない。人それぞれの幸せというものが人間にはあるものだ!!

というわけで、驟雨の隣に居るのは晴海よりも一つ年下の近所の中学に通っている三年生である。晴海よりも年下なのに身長、プロポーシヨンなどはこちらのほうが大人びている。

「本屋に行きたいんです。」

「・・・本屋ね？」

驟雨は自宅が本屋であったことを思い出して案内することにした。しかし、自宅に帰る気はあまり無いのであくまで道を教えるだけにしておこうと思ったのであった。

「ここからまっすぐ行って、一つ目の信号を右に曲がって・・・。」

「ふんふん・・・。」

頷いているので大丈夫だろうと驟雨は思っていたが、それは大いなる間違いであったことに直に気づく。

「ありがとうございました。」

「いやいや・・・」

こちらこそ話しかけてきてくれてありがとうございますと言いたかったが、黙ってその少女の後姿を見送ったのであった。そして、そろそろアパートに帰ろうかと思ってアパート側の方に歩いていくと、そこにまたその少女が居たのであった。頭から疑問符が出てきているところを見ると再び道に迷ったようだ。

「・・・どうかしたんですか？」

「あ、実は・・・教えてもらった道なんですけど、さっぱり分からなかったんです。言われたほうに進んだんですけど・・・。」

申し訳なさそうに言っているが、実際のところは超のつく方向音痴なので、聞いたところで行き着くことは無い。行き着く前に諦めるだろう・・・。

「・・・ちょっと時間もあるから、本屋ぐらいなら案内しますよ。」

「本当ですか！！ありがとうございます。」

実際のところは早く家に帰ってトイレ掃除と風呂掃除、着替えなどを済まさないといけないのだが・・・まあ、美少女に弱い驟雨はやらねばいけないものに目を瞑って知らん振りをしたのであった。

「親切にしてくださいありがとうございます。あのう、ちょっと名前を教えてくださいませんか？」

「ええ、いいですよ。坂風 驟雨って言います。」

「坂風さんですね？あの、近所の高校に通ってるんですよね？」

「はあ、まあ・・・そうですね。」

そんな会話をしながら驟雨は自宅へと帰ってきた。客入りは上々で、本屋にしては多いほうだろう。客の一人が驟雨に向かって手を振る。

「おい、驟雨！！女の子を連れて家にご帰宅かい？」

「うるさいよ、賢治！！」

女の子を店の中に入れて『ツンツン魔女っこ』という本を持っている賢治にとび蹴りを喰らわせる。

「痛いなあ。」

「賢治がそういうことを言うからだ！僕は道に迷った女の子が本屋に行きたいっていったから連れてきただけなの！！」

「そんな向きにならなくていいのに。」

「向きになってない！！」

そろそろアパートのほうに帰らないとあの二人が帰ってきているかもしれないなと驟雨は思ったので、本屋を後にしようとする。・なんと、賢治が道に迷っていた女の子に話しかけていた。驟雨はそれを止めに行った。なんとなくである。

「いやあ、驟雨に話しかけるなんて君は勇気あるなあ。驟雨はね、話しかけた女の子を・・・。」

「んなことするわけ無いわあ！！」

賢治を蹴って驟雨は女の子の前に着地。周りの客からは拍手がわく。

「冗談だよ。ま、驟雨に話しかけたってことは何かしら用事があったんだろうからね？じゃ、驟雨・・・晴海によろしくね。」

そういつて賢治は手に持っていた本を買って出ていった。驟雨も女の子にもう会わないだろうと思って最後にその顔を見て本屋を出たのであった。母親がいたが、客の相手をしていたので話しかけるのはやめておいたが、何か言いたそうな顔であったのは間違いなかった。

アパートに着くと、管理人の人とであった。

「やあ、坂風君じゃないか？」

「あ、こんにちは・・・お出かけですか？」

「ああ、まあ、仕事みたいなものさ。」

この人がどのような仕事をしているかちょっとばかり驟雨は気になったのだが、余計な詮索はやめておいた。この世界には非日常的な事が転がっていることを否定できない驟雨はその非日常的なことに既に首を突っ込んでいるので更なる混乱に自ら突き進むほどおばかさんではなかった。

「じゃ、失礼します。」

「ああ、勉強がんばりなよ？」

管理人と別れた驟雨は自分が住んでいる部屋のドアに手をかけてまわしてみた。既に誰か帰ってきているようで、簡単に開いてしまった。それが晴海ならいいなあと思いつながら、ドアノブをまわす。

「あ、おかえりなさい、驟雨さん。」

「ほっ、よかったぁ・・・ただいま、晴海ちゃん。」

家に居たのは高校一年生なのに近頃の中学生にいろんなところで負けている親友の妹であった。驟雨は安堵のため息をついて帰宅したのであった。

タッチの差であっただろう・・・驟雨が着替えて部屋を出たら里奈が今度は帰ってきたのであった。

「おや、驟雨はもう帰ってきたのか・・・。」

「う、うん・・・。」

「意外と近いとこなのかな？」

「いや、帰宅部だからだよ・・・。」

同じ学校に通っていることがばれて休み時間なんかにこられては困るので驟雨は適当にはぐらかしておいた。

「そうなの？あ、今日ね、学校で後姿が驟雨にそっくりな人を見つけたんだ。」

楽しそうに話している里奈であったが、その話を聞いていて驟雨は冷や汗をだらだらかいていた。

「でもね、追いついて前から顔を見たら全然の別人だったんだ。世の中にはやっぱりドッペルゲンガーって居るのかな？」

「はは、天使と悪魔が居るんだから居てもおかしくないんじゃないかな？それよりさ・・・。」

驟雨はこの話をできるだけ聞きたくなかったので話しを変えることにした。

「・・・僕にいいバイトがあるって言ってたけど・・・教えてくれないかな？」

「うん、いいけど？あ、晴海もやる？」

どうやら話を摩り替えることに成功したようだ。里奈はキッチンで夕飯の準備をしている晴海に聞いたりもしている。

「いや、私はいいですよ。」

「そう？ま、今のところは驟雨だけでいいかな。その仕事はね・・・」

もったいぶっている里奈に驟雨はほっとしながら里奈が話すのをまっていた。

「家庭教師だよ！！」

「か、家庭教師？」

「うん、知り合いがこっちに引っ越してきてね、それでさあ・・・そのところの奥さんと私は知り合いでね、誰か私の娘にお勉強を教えて欲しいんだってさ。で、驟雨は大丈夫かな？中学生なんだ。」

そういった里奈に晴海が口を出す。

「・・・里奈さん、その家族は人間なんですか？」

「そだよ？悪魔じゃないと思うけど？」

「なら、いいです。てっきり私は驟雨さんを罫にはめるのかと思いましたよ。そうやって驟雨さんを悪魔側に入れ込もうとしたりしてね？」

その言葉に里奈は侵害だったようで、反論した。

「ふうんだ、それを言うなら天使側に貴女が引き込もうとしてるんじゃない？昨日は驟雨と一緒に寝たんじゃないの？色気で驟雨を引き込もうとしたとか？」

それを聞いて驟雨は顔から火が出るんじゃないかと思ったのであった。対する晴海はさもあらず・・・つんと澄ましていたのであった。

「驟雨さんはそんなことをしませんよ。昨日だってかなり紳士的でした。私だって少しは覚悟はしてましたが、驟雨さんはそのまま寝ちゃったんです。」

「どうだか？ただたんに貴方に興味が無いんじゃない？そんなペタン天使なんてそら、興味が無いでしょうね。」

晴海の背中になにやら天使っぽい翼が姿を現してきた。なんだかそれがとっても危ないことのようにだったので、驟雨は急いで二人の間にわって入った。

「り、里奈……その家庭教師は勉強を教えるだけでいいんだよね？」

十一、

割って入った驟雨も大変だ。後ろからは晴海の『何、間に入っているんですか！！』光線を背中に受けながらも驟雨はさっさと里奈に尋ねた。尋ねられた里奈は頷いた。

「そだよ？なんなら今日行ってみる？」

「うん、行って勉強を教えてくるよ。」

「そう？あ、女の子がいいなあって期待してるんでしょ？」

それよりも今の状況を何とかしたいと思っている驟雨は黙っていた。里奈はうんうんと頷いて答えを言った。

「可愛い女の子でね、何処かの天使よりも凹凸が凄いだよ。」

「……里奈さん、ちょっと用事があるから表に出てくれませんか？」

どうやら晴海の我慢メーターが限界を超えたらしい……既に天使の羽というものが具現化されており、天使なのに禍々しいオーラを出している。

「へへへ、女の子からお誘いなんて受けちゃったよ。晴海、悪いけど驟雨を先にその子の家に連れて行った後でもいいよね？」

「・・・構いませんよ。」

晴海が泣く子も黙る声で答え、里奈は驟雨を連れてその子の元に向かった。詳しいことはそのお母さんが教えてくれるようで、里奈は直にアパートへと戻ったのであった。

一般的な家庭のほうではきっと裕福なほうに入るであろう・・・その家は賢治の家ほどではないが、驟雨の家よりも大きかった。驟雨は緊張しながらもインターホンを押した。数分後、がちやりと家のドアが開いた。

「どちらさまでしょうか？」

一見するとぼけぼけとしたような感じを受ける美人な奥さんが中から出てきた。驟雨は非常に緊張して胃の辺りが痛くなってきた。た。

「あ、あのー里奈に家庭教師として任された坂風 驟雨です。」

「あらあら、里奈ちゃんから頼まれたのね？それなら上がってくださいな。」

泥棒にやってきました、すみませんがお金をくださいと言われてもこの奥さんだったら家の中に入れるかもしれないとそんなくはないことを考えながら驟雨はその家の中に入ったのであった。

「ええと、聞いた話では中学生だとか？」

「ええ、そうですよ？まあ、色々あってですね、勉強なんかをなかなかしてくれないんですよ。まあ、私の知り合いに里奈ちゃんが居てですね、あの子が一時期は勉強なんかを住み込みで教えてくれ

てたんですけど・・・高校生になってからいなくなっただけ・・・この前たまたま、その里奈ちゃんにあったんですよ。ええ、駅前のおいしいケーキ屋さんがあるでしょ？あ、そのケーキ屋が・・・。」

その後、驟雨は延々とどうでもよさそうな脱線話を聞かされてうとうとしそうになりながらも健気に自分の足を思いつきり踏んだり、右腕をつねったりして睡魔と闘ったりもしていた。とても嬉しそうに話しているので驟雨もそろそろ家庭教師の話をしたいと切り出せなかった。今頃あの二人は既に喧嘩も終わらせて二人で夕食をとっているに違いない。

「・・・それでね、その近所のワンちゃんがとっても可愛いんですよ。あ、ワンちゃんといえばですねえ・・・。」

どうやらまだまだ話のねたは尽きないらしい。よくもまあ、喋れるものだなあともはや尊敬の眼差しで驟雨がその奥さんの話を聞いていると、誰か帰ってきたようだ。そろそろこの家のご主人が帰ってきてもおかしくない時間帯だ。

「・・・おや、どうやら真帆が帰ってきたようですね？あ、真帆というのは私の一人娘なんです。ええと、坂尻さんにはその子を教えるてもらいたいと思っています。真帆の好きなものはですねえ・・・。」

「ただいま、お母さん。」

リビングに入ってきたのは驟雨が今日の放課後に見た少女であった。ああ、なるほど・・・この奥さんの子どもはやっぱりこんな子なんだなあと思いつながら驟雨は固まって二人を見ていた。

「真帆、こちらは今日から家庭教師となってくれる坂風 驟雨さんよ。」

当然のように初対面じゃない真帆は当然のように驟雨を見て驚いた。

「さ、坂風さんじゃないですか！！え、どういうこと・・・お母さん！！！」

「里奈ちゃんの知り合いで今日から貴方の専属家庭教師よ。お父さんだと思って甘えちゃいなさい。」

「は・・・？」

めちゃくちゃなことを言っている奥さんに驟雨は疑問を覚えながらも真帆に尋ねた。

「ま、まあ・・・今日から家庭教師となった驟雨です。ま、よろしくお願いします。」

驟雨は家庭教師なんて初めてなので緊張していた。一応、中学の頃の内容は覚えているのでそこは大丈夫だろう。

「ちょ、驟雨さん、ちょっと部屋まで来てくれませんか？」

「あらあら、早速お勉強の開始？ 驟雨さん、それでは娘をよろしくお願いしますね。」

驟雨は真帆に連れられて二階の真帆の部屋へと入った。さすが女の子の部屋といったところだろうか？ぬいぐるみなんかが多く、フ

アンシーという奴なのであろう。

「あとう、驟雨さんは里奈さんの彼氏なんですか？」

「は・・・？」

驟雨は全く勉強に関係ないことを聞かれ、頭の中が真っ白になった。

「いや、彼氏じゃないよ。ああ、そうか・・・一時期は住み込みで真帆ちゃんを里奈が教えてたっていったよね？大丈夫、僕は里奈と付き合ってないよ。」

一緒に住んではいるけどねとは言えない驟雨であった。

「さ、勉強を開始しようか？とりあえず・・・どのくらいの学力なのか知りたいからちよつと問題を解いてくれないかな？」

里奈に何気に渡された袋から学力を測る問題集を取り出し、真帆の前においた。真帆は黙ってそれを解き始めた。

驟雨のお腹が悲鳴を上げる頃になってようやく真帆はその問題を全て解き終えた。驟雨はそれを普通に丸付けしていくと、意外な真実が判明した。

「・・・いや、真帆ちゃんは普通に頭いいんだね？満点だよ。」

「恐縮です・・・。」

いや、これなら家庭教師なんてつけなくていいんじゃないかと思いながら驟雨は丸付けを終えた。全て丸の全く先生である驟雨にと

っては面白くない展開である。事実、まだ三年生になったばかりの真帆は既に三年生の問題は全て解き終えてしまっていたのであった・・・。

「僕、君のお母さんに言ってくるよ。」

「なんていうんですか？」

「いや、なんでもないよ・・・。」

驟雨はちよつとばかり悔しく思ったのもう一枚、問題用紙を取り出した。そして、再び真帆の前においた。

「じゃ、もう一枚だけ解いてくれないかな？」

「わかりました。」

それから更に時間がたった。今日は何気に時間を無駄に消費しているのではないかと驟雨は思いながらボーっと立っていた。

「できました。」

「ん？ ああ・・・。」

驟雨は問題集をもらって採点を始めた。結果を見た驟雨は思いっきり固まった。

「・・・僕、やっぱり君のお母さんに真実を告げてくるよ。」

「何の真実ですか？」

「君には家庭教師は必要ないよ。」

驟雨はそういつて満点のテストを真帆に見せた。まあ、その問題集は既に高校一年生で習う問題がほとんどで、どちらかというと高校二年生がするべきものだろう。いや、これを中学三年生が満点を取るなんてどうしたもんだと驟雨は思ってしまう。事実、目の前に居る女の子は頭が良すぎるんじゃないかと思ったくらいだ。

ドアノブに手を伸ばした驟雨の右腕を真帆が掴む。

「ちょっと待ってください!!」

「何を待つつて言うの?これじゃ、家庭教師の僕のほうが勉強を教えてもらいたいほうだよ。お金がもったいないって言わないと・・・」

「違うんです!話を聞いてください!!」

その声に必死さが半分以上こもっていたので驟雨はドアノブを掴む手を離した。思いつき驟雨を引っ張っていた真帆は最後の力を振り絞って驟雨を引っ張ったのでドアノブから手を離れた驟雨とともにベッドに倒れこんだ。

「・・・で、話って何かな?」

無様に転んで真帆の顔の近くに転がってしまった驟雨はどきどきしながらも真帆に尋ねた。

「あの、実は・・・。」

なんだか嫌な予感がしてきた驟雨は心の準備というものをし始めた。こういうものは心の準備というものを怠ってはいけない。準備というものは人を安心させるのだ。

「まさか、私は人間じゃなくて……それ以外なんですとか言わないよね？」

「え、何で分かったんですか？」

驟雨は頭の中で至急、会議を始めた。この世に美少女が出てくるときはその美少女は今のところ百パーセントの確立で人間以外の生命体なのだ。里奈が人間だといっていたが、それも間違っていたということである。驟雨は呆れてしまつてそのままベッドに沈んだままであつた。

十二、

驟雨はもはや起き上がる気力もなく、そのまま下に居る真帆に体重を預けたままであつた。ああ、これは他人から見られたら色々誤解されるだろう……。

「で、その人間以外の真帆ちゃんは僕に何か用事でもあるのかな？」

「いや、簡単なことです。驟雨さんが何者かを探りに来たんです。そのためにわざわざ引越してまでここに来たんです。」

よくやるよと思ひながら驟雨はベッドからズリズリ落ちた。何か柔らかなものが驟雨の腕部分に当たったので驟雨はあせったからである。

「とりあえず、僕をどうにかするつもりなら、僕は悪いけど真帆ちゃんと会えないよ。そこまでまだ僕は生きちゃいないからね。ま、

これでもう会うことも無いけど・・・じゃあね。」

驟雨は急いでその部屋から尻尾を巻いて逃げ出したのであった。まあ、当然の行動といえば当然である。誰だって、得体の知れない人物と一緒に部屋にいたくない。例えばそれが美少女であっても、驟雨の場合は自分のみのほうが可愛いのでさっさと逃げ出すのだ。しかし、一応は母親に事情の一部を説明しておくことにした。

「真帆ちゃんのお母さん、真帆ちゃんの学力は僕よりも間違いなく上です！！家庭教師が勤まらなかったので僕は失礼します！！」

「あら、なら夕飯も一緒にどうかしら？」

「すみませんが、辞退させていただきます。僕にはちょっと用事があります、それが今日までなんです。それでは、ごきげんよう。」

驟雨はそれだけいってさっさと真帆の家から逃げ出したのであった。途中、こけたりもしたがそこところはしょうがない。

「くそ、何だって僕の目の前に現れる女の子たちは人間じゃないんだ！！ありえないだろう！！天使と悪魔と・・・ええい、とりあえずそんなものと一緒に居たくないっ！！」

驟雨の精神は不安定であった。まあ、しょうがないといえましょうがないかもしれない。もはや頭の中はオーバーヒートしており、医者がいればまずまちがはなく、麻酔で眠らせた後にロープで縛って安静にさせるだろう。しかし、この近辺に医者はおらず、変わりに驟雨の行く手を阻む敵的存在が姿を現した。

「・・・貴様、この前のお返しに来たぞ！！」

それは公園で晴海を襲っていた連中であつた。その連中を見た驟雨は急に胸が苦しくなったのでその場に蹲った。

「はは、何を倒れておる！さあ、この前の弁明を聞かせてみる！！」

「・・・ウルサイッ！！ウルサイイイ！！」

その近くに、賢治がいた。賢治はその光景を空から見ていたのであつた。

「・・・成程、やはり『クリムゾン』は精神が不安定になったりすると本性を現すのか・・・まあ、まだ何がなんだか分からないけど・・・その力を見せてもらうよ。ま、あんな性格の驟雨だからそこまです力は引き出せないだろうけどね・・・。」

その日、せっかく出てきた相手は驟雨によってぼろぼろにされ、再び病院に搬送された。その相手をぼろぼろにしまった驟雨は独りで公園にいたのであつた。ぽつぽつと、雨が降ってきても驟雨は移動しようとしていない。

「・・・もう、わからないよ・・・僕も人間じゃないみたいだし・・・一体、この力は何だ？」

誰もいないだろう、空に向かって驟雨は言葉を吐いた。と、空から誰かが降りてきたのであつた。

「・・・その力は、『クリムゾン』だ。前にも言っただろう？」

「賢治・・・一体、この力は何だ？僕は人間じゃないのか？」

「ああ、君は確かに人間じゃないさ。だが、それがどうかしたのか？」

「どうかしたのかって！！賢治、何故僕の目の前に現れる美少女たちは人間じゃないんだ！」

その質問に賢治は意味ありげに笑った。

「驟雨、悪いけどその質問はおかしいね・・・まず第一に、君が関わったんだ。彼女たちから関わろうとはしていない。あの悪魔だって君が助けたし、晴海だって君が助けた。挙句の果てに今度はもう一人の女の子と関係を持ったじゃないか？確かに、最後の子は自ら話しかけてきた。だが、それを君が無視すればよかったじゃないか？他者と関係を持ちたくないというのなら、無視をすればよかったんだ。それに、彼女たちは確かに人間じゃない・・・しかし・・・」

そこまで賢治が言うと、誰かが驟雨を呼んでいる声が聞こえてくる。

「驟雨！！」

「驟雨さーん！！」

どうやら里奈と晴海が驟雨を探しに来てくれたようだった。賢治はそれを知ったが、驟雨にはまだ聞こえていないようであった。

「さ、ここでもまた新たな道って物は存在しているんだよ。どうする？知ってしまった真実を知らずにこれからは逃亡の道に逃げ込むかい？驟雨、選ぶのは確かに君だ・・・。」

「僕は……」

ためらう驟雨に賢治は答えを急がした。

「後二秒。」

「えー！早すぎー！」

「二、一、ぶーっ！！残念だったね、お休み、驟雨……」

賢治の拳が驟雨の鳩尾にめり込んだ。

「ぐ……」

驟雨はその場に倒れこんだ。雨が驟雨を濡らしていたが、意識を失った彼が気にすることでもなかった。

「……さて、これも一種の未来の可能性だね……ここで誰が驟雨を見つけるのか……驟雨には悪いが、見ものだな。」

結果からいうと、誰一人として驟雨を見つけることは無かった。

そのまま朝となり、雨はやがてやんでしまった。

「うう……」

泥だらけになってしまった自分に気づき、ようやく驟雨は意識を取り戻した。太陽はそろそろ顔を出しており、公園には当然、誰もいなかった。

「僕は・・・？」

いたむ鳩尾をさすりながら驟雨は近くの公園のベンチに座った。そして、何が起こったのかを思い出していた。

「・・・これから僕はどうすればいいんだ？」

あの二人に会うのが怖い驟雨はずっとその公園のベンチで座ったままであった。しかし、何かがそうはさせなかったようだ。

「驟雨！！！」

「驟雨さーん！！！」

二人の声が聞こえてきた。驟雨は隠れようとしたが、賢治が彼が持てる全ての力を持ってして、驟雨に強力な一撃をお見舞いしていたのでそう簡単に痛みは取れていなかった。どろどろになった公園に倒れこむ。

「驟雨！！！」

「驟雨さん！！！」

二人に発見された驟雨であったが、体が全く動いてくれない。そのまま意識が遠のいていったのであった。

驟雨が目を覚ますと、そこは紅かった。

「・・・ここは？」

「ここ？ ああ、ここは一つの世界じゃよ。」

一人の老人が驟雨の答えに鼻くそをほじりながら答えた。驟雨は疑心暗鬼にかかっていたので当然のようにその老人から距離をとった。

「あ、貴方は誰だ!!」

「わし？わしはわしじゃ。何故、おぬしに名乗らなくてはいけない？まずは自分から何でも行動を起こしていかなくてはいけないものじゃ。」

逆に説教されて驟雨の頭の中は少しばかり冷却された。

「あ・・すみません。僕の名前は坂凧 驟雨って言います。」

「ふむ、じゃ、その驟雨君とやらがこの世界に何の用かな？」

「一体、この世界は何ですか？こんなに紅い世界は初めてですよ。」

驟雨の質問におじいさんは辺りを見渡すようにして答えた。

「この世界は、心に不安を持つものたちが間違って入ってきてしまう世界じゃ。自分の事を信じようとせず、更に知り合いたちにも心を開かない・・そんな連中が行き着く駅のようなものじゃ。わしはこの世界の管理人といったところであろう。で、お主も何かに対して疑っていたのじゃろう？」

「ええ、自分がいた世界が信じられなくなりました。」

「ほほう、これまた珍しい坊主じゃな。世界を信じられんと・・・

全く、困った坊主じゃ。」

老人はポケットからタバコを取り出すと咥えた。驟雨を見る目は冷ややかで、避難しているようでもあった。

「何故、そう思ったのじゃ？」

「僕のいた世界にはどうやら、人間以外の天使とか悪魔とか『クリムゾン』っていうのがいたらしいんです。それで、僕の目の前に現れる人たちは人間じゃなかったんです。」

老人はまじめに聞いているのか知らないが、口笛なんかを吹いている。いや、実際のところは聞いていないのだろう。

「なるほどな・・・この坊主はくだらないことで悩み、そして自分の心を少しばかり自ら傷つけおったのか・・・全く、難儀な性格じゃな。」

老人はため息をつく、驟雨の肩に手を置いて話し始めたのであった。

十三、

老人はにやりと笑っていった。

「驟雨君、君はこの世界のありのままの姿が見えるか？」

「え・・・？」

老人に尋ねられ、驟雨は紅く広がる世界を見渡してみた。

「紅いですね？」

「ああ、紅い・・・それだけで十分なんじゃ。ここで何か出てくればとりあえずそれが何かを知りたがるじゃろう？わしの事を知りたがったぐらいじゃしな？だが、それは間違いなのじゃ。」

「どういう意味なんですか？」

「お主は元からあるものを否定してまで自分の存在を確立させたいのか？そこまでして、自分の居場所を見つけないのか？簡単に言うなら、お前さんは取り繕ってまでしてその世界を作り上げている鎖でいたいのかと聞いておる。鎖はつながって存在しているし、必要不可欠な部品で構成されている。その一つに欠陥でもあったらその鎖は途中で千切れてしまうからな・・・だから驟雨君、君はありのままを見えるだけではないけないんだ。それが何であれ、否定だけはしてはいけない・・・。」

驟雨は何を言われているのかさっぱりだったが、大切なことをいわれたのだけは分かった。どうやら自分が間違っていたようだと思う、老人に告げた。

「・・・僕がいた世界に謝りたい人がいるんです。どうやったらこの世界から戻れるんですか？」

「簡単なことじゃ、戻りたいと思えば戻れる・・・そんな簡単な世界なんじゃよ、この世界は・・・。」

「そうですか、ありがとうございました。」

驟雨は目を閉じ、元の世界に戻りたいと思ったのであった。あの老人が結局何者だったかさっぱり分からなかったが、今の驟雨には

どうでも良かった。

目を覚ました驟雨は自分のベッドに寝かされていた。頭ががんがんし、さらにふらふらもしていた。これはどうやら風邪のようだ。

「……………」

近くには二人の姿は無く、時計を見るとどうやら学校にいる時間帯である。驟雨はため息をついて自分で何かを作ろうと部屋を出ようとした。

「…坂風さん、そのまま寝てていいですよ。」

驟雨は窓のほうを見て、驚いた。紅い何かを纏った真帆が部屋に入ってきたからである。

「真帆ちゃん…………その姿は？」

「へへ、私は『クリムゾン』なんですよ。…………どうやら坂風さんにはかなりの負担がいったみたいなんで、あの二人に代わって今日一日は私がお世話することになりました。」

「そう…………あ、それよりごめんね？僕がどうかしてたよ……………」

「いいですよ、そんなことより、早くベッドに戻ってください。」

ふらつく体を動かして驟雨はベッドに倒れこむ。

「坂風さんはかなり体が衰弱しているんですよ？無茶だけはしてはいけませんよ。それに、あのことなら私は気にしてませんし、第一、悪いのは私なんです。坂風さんが謝ることなんてひとつもないんで

すよ。」

「・・・真帆ちゃん・・・」

「私の事は嫌いでもかまいませんが、今日一日はお世話させてもらいます。坂風さんの手足となってなんでもしますよ。」

そういわれたので驟雨は聞いてみることにした。

「真帆ちゃん、『クリムゾン』って何かな？」

「・・・簡単なことです。紅という存在で、人間ではありませんが、ほぼ、人間とっていいでしょう・・・。その紅はこの世界に存在するものではなく、別のものといわれています。心を中心にして力を発揮するらしく、『クリムゾン』である人物は心が何かしらの刺激などをうけると力を解放します。それがなんにしろ、心を操ることが出来れば・・・その人は今よりも楽に生活できますよ。ま、『クリムゾン』は至って普通だと思えばいいんです。普段は人間ですし、心になにか支障がきたさない限りは力を発揮することはありません。この世界の可能性とも呼ばれています。どうでしょうね？まあ、私が知っているのはここまでです。」

真帆に説明された驟雨はなるほどなるほど・・・と頷いていた。呟いているだけで、完璧に理解しているわけではない。頭の中はぼーっとしているだけで、それ以外はあまり考えることができない。

「ところで、真帆ちゃんはクリムゾンって言ってたけど、どういうときに力を発揮したの？クリムゾンの力が発動したから自分がクリムゾンって分かったんでしょ？」

驟雨の質問に真帆が右手を頬に当てながら答えた。

「ええとですね、恥ずかしながら・・・先輩に振られたときだったと思います。それはもう、酷い状態だったんでしょね。」

両手を広げその力の大きさを表現する。

「辺り一帯にあったものを吹き飛ばしてしまいました。」

「・・・それは凄いね。」

改めて驟雨はクリムゾンの力に驚き、天井を仰いだ。

「・・・もう一つ、クリムゾンは面白い能力というものでしょうか？そういうものがあるんです。」

「どうなの？」

起き上がった時雨の顔に真帆の顔の一部分が当たる。

「なっ！！」

「・・・こうすると、強くなれますよ？どうです、元気になりましたか？」

口をパクパクしている驟雨と対照的に、真帆は笑っていた。その笑みはどこまで澄んだ笑みだった。

「って、大丈夫ですか、驟雨さん！！」

あまりの刺激のせいで驟雨はあっけなく気絶。それをみておろろするしかない驟雨であった。

その光景を外から見ながら一人の少年が呟いた。

「……ま、彼の運命はこんなものさ。だけど、これから君が決める番だよ、驟雨君。」

その日の天気は晴れで……驟雨と同居しているほかの二人は驟雨のために色々と買ってきていたのであった。

気絶している少年はその日、とても幸せな夢を見たそうだ。〈終〉

(後書き)

どうだったでしょうか？少々長かったのがいけなかったと思っています。面白かった、面白くなかったという感想をできればよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7346b/>

VITAL・CHAIN～紅い羽根～

2011年1月16日08時16分発行